

第 57号

2005年11月

京大薬友會誌

目 次

会長挨拶	橋田 充	1
第20回 21世紀の薬学を探る京都シンポジウム.....		3
退職のご挨拶	川寄 敏祐・杉浦 幸雄	6
就任のご挨拶	二木 史朗	10
人事異動.....		11
博士・修士（薬学）.....		12
旧師探訪.....		19
クラス会.....		21
分野（教室）だより.....		22
薬友会部報.....		39
京大薬友会会則.....		40
河合明彦 教授最終講義および記念パーティー		41
官庁・大学・会社・一覧.....		43



ご挨拶

会長 橋田 充

平成17年も残り少なくなりました。会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。私は、昨年2期目の薬学研究科長および薬学部長職に任命され、併せて本薬友会の会長を務めさせていただいております。国立大学法人化に続いて、薬学教育の大きな変革期を迎え、判断に迷うことの多い毎日ですが、諸先輩を初め関係各位の暖かいご協力の下に、何とか責任を全うするよう努力して参りたいと存じます。

ここに薬友会誌第57号をお届けするにあたり、薬学研究科・薬学部の近況をご報告申し上げます、ご挨拶に代えさせていただきます。

ご承知のとおり、昨年4月に我が国の高等教育のあり方を抜本的に改める国立大学法人化が実施されました。各部局におきましても、組織や研究体制の整備が急務となり、薬学研究科・薬学部でも平成9年の大学院重点化以来進めております組織の再編・整備に長期的展望のもとに取り組んでおります。具体的には、医療現場と製薬産業に代表される“社会”との連携を目標とする“創薬医療連携薬学コア部門”や寄附講座“創薬神経科学講座”、“医薬品理論設計学講座”の設置など、医療薬学教育の充実と創薬研究・教育の高度化に向けた基盤整備を進めています。また、学内外との連携プロジェクト等の推進にも積極的に取り組み、21世紀COEプログラム「ゲノム科学の知的情報基盤・研究拠点形成（代表：金久實化学研究所バイオインフォマティクスセンター）」も順調に進捗しております。

現在、私共にとりまして最も大きな課題となっておりますのは、いうまでもなく薬学教育の充実、高度化を目的とする教育制度改革

であります。昨年、国会で学校教育法及び薬剤師法の一部改正法案が可決・成立し、来年4月には新制度に基づく薬学学部教育がスタートします。今回の教育制度改革におきましては、薬学部の学部教育として、“臨床に係る実践的な能力を培うことを主たる目的とする6年制課程”と、“薬学に関する研究、製薬企業における研究・開発・医療情報提供など多様な分野に進む人材の育成のための4年制課程”の、2つの課程を並置する制度が提案されました。薬学教育の理念、あり方につきましては関係者の中でも多様な意見のあるところではありますが、新制度は、6年制の薬剤師教育と薬剤師以外の多様な進路を目指す学生のための4年制学部教育を併置するという、ある意味で“薬学教育の理想を追求した制度設計”ともいえるものであります。京都大学では、両学科の入学定員を、卒業生の進路、社会のニーズ、教育担当能力など、多角的に判断しまして、30人（薬学科：6年制）と50人（薬科学科：4年制）に定め、入学試験におきましては両学科を分離して募集することに致しました。これから、長期実務実習体制の整備、共用試験の準備、実務家教員の任用など、多くの項目にわたりまして実施体制の構築が必要ですが、現在その実現に向け研究科をあげて作業を進めているところです。幸い、特別教育研究経費の申請を始め、新制度実施の基盤となる財政的裏づけも、徐々に整備されつつあり、新制度も順調に立ち上がるものと期待しております。

一方、これら教育改革、研究推進の土台となります施設の整備に関しましても、総合研究棟に引き続きまして、昨年教育棟の新営と

薬学部本館東西棟及び薬学部記念館の全面改修が終了し、教育・研究施設の充実・整備が進展しました。現在は、一連の整備計画の最終段階となる薬学部本館南北棟の改修整備が計画中です。

さて、研究科構成員の異動の面から1年を振り返りますと、本年3月31日付けをもちまして、生体分子認識学分野担当の川崎敏祐教授と薬学研究科協力講座である化学研究所生体機能化学分野の杉浦幸雄教授が定年によりご退職されました。川崎先生は、本学大学院博士課程を修了後、昭和44年に生物化学教室の助手にご就任になり、講師、助教授を経て平成元年に教授に昇進されました。平成10年より2年間は、薬学研究科長・学部長として、研究科のみならず京都大学の運営と発展にもご貢献いただいております。杉浦先生は、本学をご卒業後昭和40年に放射性薬品化学教室の助手にご就任になり、同助教授を経て昭和63年化学研究所抗癌医薬開発部門の教授に就任されました。以後、化学研究所所長など学内の要職をおつとめになりました。また、両先生とも、日本薬学会賞をご受賞になるなど学術上高い評価を受けておられます。本機会に、両先生の薬学研究科・薬学部に対する長年のご貢献に対し改めて厚く御礼申しあげたいと存じます。さらに、同日付で3人の助教授の先生がご栄転になりました。新天地での一層のご活躍をお祈りしたいと思います。

一方、ご停年退職あるいはご栄転の先生方の後任として、多くの新進気鋭の先生をお迎えしました。生体機能化学分野の担当教授には二本史朗先生が昇任され、また、助教授、講師、助手として新しい先生に加わっていただいております。

さて、教員の異動と致しましては、明年3月に河合明彦教授が本学の規定によりご定年をお迎えになります。記念事業会はすでに発足し、最終講義、記念パーティー等の行事の

概要が本誌に掲載されておりますが、皆様のご賛同を賜り、先生の本学に対する長年のご貢献に感謝の意を表するに相応しい事業が進められることを願っております。

以上、ご説明させていただきましたように、薬学研究科・薬学部は、薬学教育改革・教育年限延長というドラスティックな変革を目前に控えております。また、同時に新しい研究体制の確立、施設整備、大型研究プロジェクトの遂行など、多くの課題にも取り組んでおります。既にご承知の通り、京都大学大学院薬学研究科・薬学部では、創設70周年を迎えます平成21年を目標に、教育・研究施設の近代化、医療・産学連携の体制整備、学術国際交流の推進などの事業に研究科を挙げて取り組むため、創設70周年記念事業会を発足させ、薬友会会員の皆様をはじめ関係各位に募金のお願いをさせていただきました。お蔭様で、会員の皆様より既に多くの寄付お申し込みを頂き、関係者一同、皆様の温かいご理解とご支援に深く感謝申し上げている次第でございます。募金は、引き続き進めさせていただいておりますので、ご協力を重ねてお願い申し上げますと共に、お手続き等不明の節は小職あるいは薬友会事務局までお問い合わせいただきますようお願いいたします。

薬学研究科一同は、これからも新しい薬学像の構築を目指しより一層力を合わせ努力してまいりたいと存じます。薬友会会員の皆様には引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。最後に、皆様方の一層のご健勝とご活躍を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

「第20回 21世紀の薬学を探る京都シンポジウム」に参加して

2004年10月9日、全面改修され新しく生まれ変わった薬学部記念講堂で「第20回 21世紀の薬学を探る京都シンポジウム」が“未来医療における薬学の役割”と題して開催された。折り悪く日本列島を襲った台風の影響が心配されたが、幸いにも大きな影響はなく150名近い参加者の集う盛会となった。

開会にあたり、橋田充薬学研究科長よりご挨拶があり、薬学教育においては平成18年度から6年制への移行を迎えること、また、製薬・創薬においてもゲノム創薬・ハイスループットスクリーニングなどの新しい方法論の発展が目覚ましいことから、今回、“未来医療における薬学の役割”というテーマでシンポジウムが企画されたことが説明された。さらに、薬学研究科の近況として、組織・ソフトの面ではゲノム創薬分野、構造生物薬学分野の2つの新しい研究分野と2つの寄附講座が導入されたことや21世紀COEプログラムに関する活動について、他方、ハードの面では総合研究棟の新設、本館の全面改修、教育棟の整備について報告された。

シンポジウム最初の演者は瀬崎仁先生であった。ご存知のように、瀬崎先生は前の薬剤学教室教授で、本学名誉教授、また現在は日本学術会議会員としてご活躍されている。今

回のシンポジウムでは、「科学・技術への理解と共感の醸成」と題して、日本学術会議会員としての立場から講演された。講演では、最初に、科学と社会の関係の歴史の変遷を説明され、その後、期待される薬剤師像に話題を展開された。すなわち、これまでの科学は知識を論文という形で共同体が経営する学術誌に蓄積し、同じ共同体仲間の研究者が読むことで流通するという“自己完結型性格の強い”ものであったが、現在では学術的知識が社会の多くの意思決定に必要となっており“社会の中の科学”としての科学の役割が重要になっていることをわかりやすく解説された。また、薬学教育においては、世界をリードする薬科学研究者となりうる人材の育成とともに、患者中心の医療を実践できる薬剤師の育成の重要性を強調された。生命の世紀を支える薬剤師業務は、サイエンスをベースとすること、すなわち“知を活かし価値を創造する社会活動”が重要であり、この担い手として町の開局薬剤師が社会から信頼される専門家集団であるべきことを示された。

続いて、杉村征夫先生のご講演に移った。杉村先生は三共株式会社代表取締役副社長であり、研究開発統括本部長も兼任されている。本シンポジウムでは「製薬企業における研究



瀬崎先生



杉村先生



成宮先生



阿曾沼先生

開発」と題して、製薬企業における医薬品開発の現状と方向性を説明された。すなわち、

日本では医薬品開発にかかる期間が長いことなど、日本の製薬企業が抱える新薬開発の問題点を把握し、欧米での開発を含めて世界的視野に立った開発を行う必要があること、

バイオテクノロジー・バイオロジクスに基づいた医薬品は成功確率が高いこと、最近では医薬品の“Discovery”ではなく、“Preclinical Development”が開発のネックになっていること、“Right product”選択の重要性と難しさなどを例示されたのち、医薬品開発ではQuality-Time-Cost (QTC) のバランスを考えた意思決定が重要であること、及びこれらを実現するための三共株式会社の組織について解説された。これらの中で、10年後のマーケットは営業サイドからは予測困難であり長期の開発計画はサイエンスに基づくべきであること、画期的な製品はマーケットを変化させることなど、サイエンスをベースとした医薬品開発への視点を強調された点が印象的であった。

なお、冒頭に述べた薬学部記念講堂の改修は三共株式会社のご支援によりなされたものであり、ご講演の後、三共株式会社への感謝状が杉村先生に贈呈された。

休憩をはさんで、本学医学研究科長、成宮周先生のご講演、「医薬連携と創薬研究」が始まった。成宮先生は、プロスタグランジンに関する薬学との共同研究のご経験をまじえ、医学研究科の在り方と創薬、薬学との連携について講演された。現在、医学研究科では基礎医学とともに、個体の生物学、病気の生物学、臨床科学、EBMが重要なテーマとなっている。また、附属病院ではTranslational Researchや先端先進医療が重要な課題である。他方、創薬では研究が病気・病態とどのように結びつくかを意識することが重要である。これらの観点から、医薬連携は非常に重要な課題であるが、医学研究科と薬学研究科との連携は必ずしも十分ではないとの考えを示された。また、探索医療センターでの取り組みにおいても合成医薬品は候補に挙がっておらず、このことから医薬のさらなる連携が必要であることを示された。他方、成宮先生ご自身は、プロスタグランジンに関する研究で薬学（当時の市川先生のグループ）と共同で研究する機会を持たれたが、このような共同研究をエピソードではなく、システムとして構築することの重要性を強調された。今後の医薬連携を通じて、成宮先生のご講演の中に出てきた“医師主導の臨床治験”という言葉が“医薬主導の臨床治験”に変わることを期待したい。

シンポジウムの結びは、厚生労働省医薬食品局長、阿曾沼慎司先生による「医薬行政と医薬品開発」に関するご講演であった。阿曾沼先生は、最近の医薬品承認申請の動向から、承認審査体制の強化・新法人（医薬品医療機器総合機構）の審査体制、わが国の治験の問題点、妊婦・小児に対する対策などの新しいシステム、医薬品・医療機器の承認の方向性、さらには、薬学教育6年制への改革、に至る厚生労働省の最近の取り組みについてわかりやすく解説された。これら

第20回 21世紀の薬学を拓く京都シンポジウム
未来医療における薬学の役割

日時：平成16年10月9日(土) 13:30~
場所：京都大学薬学部記念講堂

13:30~13:45 挨拶 薬学研究科長 橋田 充
13:45~14:25 座長 高倉 喜信
1. 「科学・技術への理解と共感の醸成」
日本学術会議会員、京都大学名誉教授 瀬崎 仁
14:25~15:05 座長 半田 哲郎
2. 「製薬企業における研究開発」
三共株式会社代表取締役副社長 杉村 征夫
15:05~15:20 休憩
15:20~16:00 座長 金子 周司
3. 「医薬連携と創薬研究」
京都大学大学院医学研究科長 成宮 周
16:00~16:40 座長 川野 敏祐
4. 「医薬行政と医薬品開発」
厚生労働省医薬食品局長 阿曾沼 慎司
16:50~ 懇親会（於：薬学研究科総合研究棟1階ホール）
世話人：薬学研究科 赤池昭紀、佐治英郎
参加費：無料（シンポジウム、懇親会共、事前登録は不要です）
問合せ先：京都大学大学院薬学研究科 赤池昭紀
〒606-8501 京都市左京区吉田下町通町 46-29
Tel 075-753-4550 Fax 075-753-4579
E-mail aakaik@pharm.kyoto-u.ac.jp

の中で、“遅い、質がよくない、費用も高い”といわれる現在の日本の治験制度を、審査期間の短縮目標（80%を12ヶ月以内に審査）を掲げて改革しようとする取り組みに対する具体的な説明は特に参加者の興味を引いていた。このような改革が実現し、世界に誇れる治験システムが確立されることが望まれる。

この後、場所を新総合研究棟のロビーに移し、懇親会が行われた。懇親会にも100余名の参加者が集い、大変にぎやかな会となった。

以上のように、今回のシンポジウムでは“未来医療における薬学の役割”について、薬学研究、製薬産業、医学研究、さらには、医

薬品行政を代表する4名の先生方の講演が行われた。これらの講演は、科学・薬学の今後の方向性に対する異なった視点からのアプローチであり、それぞれに示唆に富んだ内容であった。懇親会も含め、“未来医療における薬学の役割”を考え、討論する非常に良い機会であった。最後に、参加者の皆さんにとっても有意義なシンポジウムであったことを祈念するとともに、ご講演いただいた先生方、世話人の先生方に御礼を申し上げて報告を終えたい。

（病態機能分析学分野 久下裕司）



懇親会の様子



退職のご挨拶

川 寄 敏 祐

昭和35年4月京都大学薬学部が医学部薬学科より薬学部として独立した年に第1回の学生として薬学部に入學して以来、薬学部にお世話になり、本年3月末日に退職致しました。45年間の長きに亘り、ご指導、ご協力、賜りました諸先生、諸先輩、同僚、後輩の皆様方に厚く御礼申し上げます。

私は昭和39年、故鈴木友二京都大学名誉教授の後任として着任された恩師山科郁男先生より初めて本格的・正統的な生化学研究の手ほどきを受けました。なかでも実験科学における論理性の重要性を教えてくださいましたことは、その後の研究生活での最も大きな財産となりました。また、当時、教室の助教授（現北海道大学名誉教授）の小山次郎先生には、免疫化学の基礎、生物学への興味をご教示いただきました。1974年より2年間、山科教授のご高配により、NIHのG.Ashwellの研究室に留学しました。ここでは糖結合活性をもつタンパク質（受容体）「動物レクチン」の研究を始めました。動物レクチンの発見は、糖鎖が生命情報を担うシグナル分子であることをわかり易く示したことで「糖鎖生物学」の概念の確立に大きな影響を与えたと考えています。

平成元年には、生物化学講座の三代目教授に任じられました。平成9年には、大学院重点化に伴い、大講座制が導入され、本講座は生体分子認識学分野と改名されました。動物レクチンの研究では、血清中に発見した新しいレクチン、マンナン結合タンパク質（MBP）が補体系を活性化することを見だし、生体防御因子としての動物レクチンの役割を明らかにすることができました。また、教授就任の少し前より始めた神経特異的糖鎖抗原 HNK-

1の研究では、本抗原がシナプスの可塑性維持に必要であり、空間学習能力の獲得に必要なことを示すことができました。日本の糖鎖生物学の発展の一翼を担うことができたことを幸せに思っています。

平成10年5月には薬学部長を拝命しました。学部長として最も力を注いだのは大学院重点化後の最大の課題として残されていた薬学部校舎の増築の問題でした。しかしながら、工学部の桂キャンパス移転決定の時期と重なり、実際に予算が認められたのは、私が学部長を終えた年、平成12年の師走のことでした。国立大学の独立法人化は昨年、平成16年4月にスタートしましたが、当時すでに、その方向に向けての体制づくりが進んでいました。このような背景のもとで、薬学部は、薬剤師教育を担うと同時に、創薬研究の基盤となる「物質化学に強いライフサイエンス研究の重要拠点」として学内外での認知度を高めることが大切であると考え、学部内のコンセンサスづくりを進めました。また、学部長就任前後に最終局面を迎えた独立専攻「生命科学」への薬学部の関与についても、同様な観点から取り組みました。大講座制のなかでの研究体制の堅持にも努力しました。独立法人国立大学の行方は外部資金獲得競争の激化に向かうことが確実視されており、これらの課題の重要性はこれからも決して低くはならないものと思います。また、全国的な薬学部の重要課題である6年制化については、京都大学ではそれ程深刻な影響を受けることなく、移行できるものと思いますが、いずれにしても、学内外の英知を結集してこれに当たり、これからも、産・官・学にわたり新しい薬学の指導

者を輩出し続けることを祈念いたします。

さて、私は本年4月1日より、立命館大学草津キャンパス内に新設された糖鎖工学研究センターに勤務しています。ポストゲノム研究の最重要課題とされる糖鎖研究の面白さをもう少し楽しみたいと思っています。なお、私の後任人事も順調に進んでいると側聞しております。ただ、鈴木友二先生以来の生化学の伝統は継続しないとのことでございます。

これに繋がる薬友会の皆様に対しましては、私の不徳のいたすところと、この場を借りて深くお詫び申し上げます。皆様におかれましては、一層のご研鑽をつまれ、それぞれの周囲に新しい伝統基盤を打ち立てていただきたくお願いするしだいです。

末筆になりましたが、京大薬友会のますますの発展と会員の皆様のご健勝をお祈りいたします。



退職のご挨拶

杉 浦 幸 雄

1965年に助手に採用されて以来、薬学部で22年5ヶ月、そして化学研究所で17年3ヶ月と都合39年8ヶ月もの長い間、京都大学に勤めさせていただきましました。無事、定年退職ができましたのも偏に、諸先生、諸先輩、同僚、後輩の皆様方のご指導、ご支援、そしてご協力のお陰と厚く感謝を致しております。京都大学という種々の面で恵まれた環境の中で、研究・教育に没頭できましたことは大変幸福であったと感じています。何よりも自由な雰囲気の中で、伸び伸びと力一杯やらせていただきました。

京都大学に入学したのは1960年、丁度安保闘争の年でありました。教養部の1年間は宇治分校で過ごしましたが、当時、京大生協の食堂ではご飯12円、みそ汁5円でした。今では想像もつかない物不足の時代でしたが、のどかな自由な雰囲気が漂い、みんな明日に夢と希望を抱きながら懸命に頑張っていました。あの時の熱い思いが、その後を支えていたように思われます。

1965年、京大薬学部の13番目に誕生した放射性薬品化学講座（主宰田中久教授）の助手に採用していただきました。当時まだ修士課程の途中であった私は、助手の職務も充分弁えず、ひたすら前に突っ走っていました。2年後輩の学生さんに実習指導をしていましたが、今思い出すと冷や汗ものであります。

1988年、宇治キャンパスにある化学研究所抗癌医薬開発研究部門の教授として赴任しました。当時、抗癌医薬開発部門は時限（10年）部門でしたので、短期間で成果を上げる必要がありました。プレオマイシンやエンジイン抗癌抗生物質の作用メカニズムの解明や新規

抗癌物質の開発などに関して、教室員の頑張りや質・量ともに著しい研究成果を挙げることができました。お陰で時限を完全に解消することに成功し、1992年の化学研究所の改組で生体反応設計研究部門に衣がえをしました。これをきっかけに、それ迄細々と続けていた亜鉛フィンガー研究に全力を投入しました。

薬学部に在籍していた頃は、薬学らしい研究を全く意識したことはありませんでしたが、化学研究所に移ってからは自然に薬学らしい研究を考えるようになりました。おそらく化学研究所では理・工・農・薬・医の理系の各学部の出身者から構成されたヘテロな集団であり、その中でアイデンティティを示すために自然と薬学を意識したように思います。日本を離れるとかわって日本の本質がよく見えるようになるのと同じです。いずれにしても研究の普遍性と独自性を学ぶのに化学研究所は好適な場所であったと思います。

思いがけず、1998年に化学研究所の所長、そして2000年に附属図書館宇治分館長に選ばれ、京都大学の運営と発展に微力ながら関わられたことを喜んでます。特に、2000年の図書館商議員の時に専門委員会委員長として、京都大学における重複雑誌の調整と電子ジャーナルの拡充に貢献できたことは今では懐かしい思い出の一つです。

大学では国立大学法人化が始まり、また薬学部では6年制・4年制の新しい薬学教育が開始されようとしており、大きな変動の時期を迎えています。このような環境の中で、京都大学らしい自由な気風に満ちた研究と教育を維持・発展させるには大きな努力が必要でありましょう。

学内外の力を集結し、この激動の時期を逞しく乗り越えていただきたく思います。最後に、

京大薬友会のますますの発展と会員の皆様方のご健勝を祈念しながら筆を置きます。



就任のご挨拶

生体機能化学分野教授 二木 史朗

薬友会会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。本年4月1日付で杉浦幸雄先生の後任として生体機能化学分野（化学研究所生体機能化学研究系生体機能設計化学研究領域）を担当させていただくことになりました。本誌面をお借りしまして自己紹介かたがたご挨拶申し上げます。

京都の長岡京市で育ち、昭和54年に京大薬学部に入學しました。卒業研究では矢島治明先生が主宰されていた薬品製造学研究室に所属させていただきました。学部の講義で蛋白質化学の講義を聴いて面白いと感じ、自分でペプチドや蛋白質が作れると何か新しい切り口でその構造と機能について理解できるのではないかと思ったことが発端です。以後、何らかの形でペプチドの合成に携わってきています。大学院に進学後、昭和62年に徳島大学薬学部の薬品製造化学研究室助手に採用されました。当時の教授の秋田正先生のご厚意で米国ロックフェラー大学に留学する機会をいただきました。その後教授に着任された落合正仁先生の下で有機反応論に関して改めて勉強させていただいたあと、徳島大学薬学部に附属医薬資源教育研究センターが新設されたのに伴い、平成5年、同センターの環境生物工学分野助教授に昇任させていただきました。当時の教授の丹羽峰雄先生から遺伝子の取り扱い等に関して様々なことを教えていただくとともに、ペプチドのデザインと機能化の試みを始めました。

平成9年に化学研究所の杉浦幸雄先生の研究室（生体反応設計研究部門、当時）の助教授にさせていただいたのを機に、細胞を扱う仕事を始めました。以前からイオンチャネル形成ペプチドを扱っていたこともあり、膜とペプチドとの相互作用に関しては特に興味

を持っていましたが、ひょんなことからアルギニンに富む塩基性ペプチドが細胞膜を効率的に透過し、このようなペプチドを利用することにより様々な蛋白質や薬物を細胞内に導入できることを知りました。膜透過の機序を理解することは、さらに合理的で効果的な細胞内移送系の開発につながると考えられます。また、膜透過の機序自体も、従来知られている薬物取り込み系とは大きく異なることが示唆されています。このような理由から、ペプチドのデザインを通じてこの機序を明らかにしようと試みてきました。これは同時に、私のようなケミスト上がりの人間が細胞を知る良いきっかけになったと思っています。

細胞の中では、様々な物性を有するコンパートメントや分子がひしめき合い、動き回っています。その中で分子の相互作用は、試験管の中のものとは異なる場合も多々あるのではないかと思います。前任者の杉浦先生は、抗ガン剤の作用機序の化学や亜鉛フィンガー型DNA認識蛋白質の設計など生体機能化学の分野で輝かしい業績を挙げて来られました。これらの伝統を生かし、化学の視点から細胞という「場」を理解し、この中で目的の役割を演じるペプチドや蛋白質のデザインを考えることを通して、従来見過ごされていた細胞の営みや薬物設計に関する新しい概念を得ることが出来ないかと考えています。

独立行政法人化や、6年制導入などで、私どもを取り巻く環境は大きく変わりつつあります。しかし、このような時こそ、いたずらに時流に流されることなく、少し長期的なスタンスでの薬学における化学と生物との接点を考える研究と教育が出来ないかと考えております。どうか皆様のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

人事異動

(平成16年11月1日～平成17年10月31日)

氏名	年月日	
桂 敏也	平成16年12月1日	医療薬剤学助教授(医療薬剤学講師より)
増田 智先	平成17年1月1日	医療薬剤学講師(医療薬剤学助手より)
椿 一典	平成17年1月1日	精密有機合成助教授(精密有機合成学助手より)
上井 優一	平成17年1月16日	医療薬剤学助手(附属病院薬剤部薬剤師より)
木原 武士	平成17年2月1日	創薬神経科学寄附講座講師 (創薬神経科学寄附講座助手より)
玉村 啓和	平成17年3月1日	薬品有機製造学助教授(薬品有機製造学講師より)
大高 章	平成17年3月31日	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部教授 (薬品有機製造学助教授より)
玉村 啓和	平成17年3月31日	東京医科歯科大学生体材料工学研究所教授 (薬品有機製造学助教授より)
南 雅文	平成17年3月31日	北海道大学大学院薬学研究科教授 (生体機能解析学助教授より)
川崎 敏祐	平成17年3月31日	定年退職(生体分子認識学教授) (立命館大学COE推進機構特別招聘教授へ)
杉浦 幸雄	平成17年3月31日	定年退職(生体機能化学教授) (同志社女子大学薬学部教授へ)
有海 康雄	平成17年3月31日	熊本大学エイズ学研究センター助手 (腫瘍ウイルス薬品学助手より)
二木 史朗	平成17年4月1日	生体機能化学教授(生体機能化学助教授より)
矢野 義明	平成17年5月1日	薬品機能解析学助手(新規採用)
中川 貴之	平成17年7月1日	生体機能解析学助教授(生体機能解析学助手より)
大野 浩章	平成17年7月1日	薬品有機製造学助教授 (大阪大学大学院薬学研究科助手より)
田中 智之	平成17年10月1日	武庫川女子大学薬学部助教授 (生体情報薬学助手より)
柳田 玲子	平成17年10月16日	薬品分子化学助教授 (薬品分子化学講師より)

博士（薬学）の学位授与される

平成16年9月24日

Warunee Leesajakul

Preparation and characterization of lipid nanoparticles containing nonlamellar liquid crystalline phases

（非ラメラ液晶相を有する脂質ナノ微粒子の調製と物性評価に関する研究）

伊藤 寛之

浸透移行性を有する農業用アゾール殺菌剤の創製に関する研究

澤田 由紀

非ペプチド性ブラジギニンB2リガンドに関する研究

鉤 克江

関節リウマチモデル動物における病態と炎症性サイトカインに関する研究

細川 俊仁

脂質分散系製剤からの薬物放出制御に関する研究

中村 恵宣

1-アリアルナフタレンリグナンをScaffoldとするPDE5特異的阻害化合物の合成研究

吉澤 秀則

MRSAおよび緑膿菌に対し強い抗菌活性を併せ持つ新規注射用広域セフェム剤の開発研究

小田 健司

ワクチンアジュバントの構造活性相関に関する研究

平成17年1月24日

池田 和仁

脳由来神経栄養因子および毛様体神経栄養因子の網膜保護作用に関する薬理学的研究

村上 建吾

チエノアゼピン系アルギニンバソプレッシン拮抗化合物の合成研究

岩下 明令

選択的poly (ADP-ribose) polymerase阻害薬の中枢神経保護作用に関する薬理学的研究

鹿野 直人

腎臓の核医学機能診断のための放射性ヨウ素標識アミノ酸に関する基礎的研究

岡 美智子

虚血性ニューロン死における電位依存性Ca²⁺チャネル $\alpha_2\delta$ サブユニットの役割に関する研究

前本 琢也

新規ピラゾロピリジン系拮抗薬を用いた脳内アデノシンA1受容体の生理機能に関する薬理学的研究

富田 泰彦

炎症性内臓疾患における分泌型ホスホリパーゼA₂の関与

平成17年3月23日

井口 麻由

α -シリル酢酸エステルのリチウムエノラートを用いた不斉付加反応に関する研究

住吉 孝明

リポゲル化ジアミド分子の構造修飾によるヒドロゲル化剤化

添田 貴宏

ジアルキル亜鉛の触媒的不斉共役付加反応を指向したキラルアミドホスファン-銅(I)触媒の探索

沖野 友孝

相間移動触媒を用いた不斉アルキル化反応とチオウレア誘導体を用いた求核反応の開発

吉田 和正

Ir触媒を用いた位置およびエナンチオ選択的なアリル位置換反応の開発

木村 智子

Quantitative protein binding analysis of highly hydrophobic drugs and endogenous substances (高疎水性の薬物及び内因性物質の定量的タンパク結合解析)

矢野 義明

Fundamental studies on membrane protein folding using model transmembrane helices (モデル膜貫通ヘリックスを用いた膜タンパク質フォールディングに関する基礎的研究)

森田 真也

Roles of sphingomyelin and ceramide in membrane structure, apolipoprotein binding, and cell uptake of lipid particles (脂質粒子の膜構造、アポリポタンパク結合、および細胞取り込みにおけるスフィンゴミエリンとセラミドの役割)

川上 晋平

不斉記憶型アルキル化による不斉炭素 - 炭素結合形成

楠本 友和

機能性フェノールフタレインを用いた呈色型認識

田中 弘之

1,4-位連結型オリゴナフタレン類の合成及び機能開発に関する研究

中川 知明

マンナン結合タンパク質 (MBP) の生理機能に関する研究

Krit Thirapanmethee

狂犬病ウイルス糖タンパク質の構造的成熟についての基礎的、応用的研究

津村 明子

胚性幹細胞におけるDNAメチル化の役割

浅木 敏之

脂肪組織形成におけるFgf10の役割の解明

山下 哲雄

新規FGF、FGF-23の同定とリン酸代謝、及び免疫応答調節における役割に関する研究

黄 檠 達人

外的刺激によるヘリックス構造の可逆的制御とその応用

中 瀬 生 彦

塩基性キャリアペプチドの細胞内移行メカニズムとキャリアペプチドを用いた生理活性物質の細胞内導入に関する研究

野 村 涉

亜鉛フィンガータンパク質のDNA結合におけるリンカー配列の影響に関する研究

荒 川 陽太郎

口腔粘膜適用フィルム製剤の調製方法ならびに処方設計に関する基礎的検討

Chittima Managit

Development of galactosylated liposome and emulsion for hepatocyte-selective drug delivery (肝実質細胞選択的薬物送達を目的としたガラクトース修飾リポソームおよびエマルジョン製剤の開発)

服 部 芳 幸

抗原提示細胞選択的遺伝子導入に基づく細胞性免疫誘導型新規DNAワクチン製剤の開発に関する研究

樋 口 ゆり子

フコース修飾カチオン性リポソームを用いたNF- κ BデコイのKupffer細胞選択的送達に関する研究

白 川 久 志

大脳皮質におけるニューロアクティブステロイドによる興奮性神経毒性の制御機構に関する研究

高 田 悠 記

アルツハイマー病治療効果を有するアセチルコリンエステラーゼ阻害薬の神経保護作用に関する研究

田 口 良 太

内因性神経保護活性物質セロフェンド酸によるアポトーシス制御およびその機序に関する研究

金川直樹

機能性精神疾患の核医学画像診断を目的とする脳内ノルエピネフリントランスポーター結合性放射性薬剤の開発

川瀬篤史

DNAワクチンの最適化を目指したプラスミドDNAおよび樹状細胞の動態解析と免疫応答の制御に関する研究

吉永貴治

マウス樹状細胞におけるプラスミドDNAの取り込みおよびその後の活性化機構に関する研究

入江めぐみ

数数学的モデルを活用した小腸ペプチドトランスポーターの機能特性に関する研究

平成17年7月25日

高垣和史

Ara-C添加による白血病細胞の分化誘導および薬剤耐性メカニズムの解析

安原智久

アリアルリチウムのニトロオレフィン選択的共役付加反応と立体選択的ニトロマイケル閉環反応の開拓とリコラン類への合成展開

石橋徹

白金錯体抗癌剤ネダプラチンの体内動態・副作用の速度論的解析と最適投与設計に関する研究

平成17年9月26日

马慎丰

Site-specific delivery of catalase by cationization for prevention of reactive oxygen species-mediated tissue injury (活性酸素組織障害の抑制を目的としたカチオン化によるカタラーゼの部位特異的デリバリーに関する研究)

Oranuch Thanaketpaisarn

Optimization of nonviral gene delivery system for in vivo gene therapy (In vivo遺伝子治療実現に向けた非ウイルス型遺伝子デリバリーシステムの最適化に関する研究)

島田孝志

線維芽細胞増殖因子23は血中のリン酸およびビタミンD3濃度を負に調節するために必須な因子である

修士（薬学）の学位授与される

平成17年3月23日

加藤 輝 和

Hydroxyethylamine型イソスター構造を基盤とする β -secretase阻害剤の創製研究

西川 裕 輝

膜融合段階を標的とした抗SARS-CoV活性ペプチドの創製研究

藤田 瑞 乃

HIV感染初期過程を標的とした膜融合阻害剤の創出研究

水本 真紀子

Cis型ペプチド結合等価体としての(*E*)-フルオロアルケン含有ジペプチドイソスターの合成法に関する研究

坂井 健 男

嵩高いリチウムアミドによる不斉共役付加反応

田原 照 之

抗腫瘍活性ハイブリッドの設計と合成

畑 誠 司

リチウム酢酸エステルエノラートのイミンへの不斉付加反応

浅田 隆 太

デヒドロアミノ酸誘導体のタンデム反応を基盤とする α,α -ジ置換アミノ酸の合成

小比賀 真 吾

インジウムによるラジカル環化反応を利用した立体選択的オキシインドール骨格の合成

帆 足 保 孝

多機能型チオウレア触媒を用いたエナンチオ且つジアステレオ選択的なマイケル付加反応の開発と(-)-epibatidineの全合成

山岡 庸 介

イミン類のアリル化およびプロパルギル化反応位置選択性に与える水の影響

細井 まどか

シソ属植物のモノテルペン及びセスキテルペン合成酵素遺伝子の解析

本宮 知 子

ウズベキスタン薬用植物 *Helichrysum maracandicum* に含まれる抗発ガン活性成分の研究

小倉 まい

膜貫通ヘリックスの脂質間移行熱力学量の計測

北野 正 寛

生細胞を用いたGタンパク質共役型受容体の複合体形成原理及びその生理的意義の解明を目指して

河本 浩 明

ペルオキシソームタンパク質PMP22におけるPex19p結合領域の検討

山口 葉 子

Fructosyl- amino acid oxidase from *Corynebacterium* sp. 2-4-1のX線結晶構造解析

田中 寿 樹

遊離脂肪酸によるGLP-1分泌促進作用と糖尿病治療への応用

礪谷 佳 代

公共マイクロアレイデータベースを用いた嗅覚受容体の発現分布解析

生川 佳 代

Gタンパク質共役型受容体の膜貫通領域予測ツールの開発

福永 慎 一

受容体細胞内局在変化の定量化によるオーファンG蛋白質共役型受容体のリガンド探索

佐藤 康 彦

ペルオキシソーム膜タンパク質輸送に関与するPex3pの単離精製、及びPex19pとの結合機能の評価

桜井 敦 司

コレステロールによる表面修飾がもたらす
脂質粒子のマクロファージ取り込みの促進

二 村 美 穂

アポリポタンパク質Eの細胞表面へバラン
硫酸プロテオグリカン結合の分子機構

白 井 亮

不斉記憶型アルキル化の反応機構の研究

西 尾 忠

二官能基性求核触媒の合成と反応性

東 野 育 代

ペプチドカテナンの創製

三 浦 正 哉

光学活性オリゴナフタレン類の効率的合成
と機能

木 山 由 奈

マウス免疫系における非硫酸化型HNK-1糖
鎖の発現に関する研究

田 川 秀 樹

マウス腎臓における非硫酸化型HNK-1糖鎖
に関する研究

野 中 元 裕

細胞内MBPによる糖タンパク質の翻訳後修
飾・輸送に関する研究

平 野 真

マンナン結合タンパク質によるMepprinのN-
結合型糖鎖認識と酵素活性の調節

三 輪 桂 子

表面プラズモン共鳴法を用いたマンナン結
合タンパク質(MBP)-糖鎖間の相互作用お
よび機能に関する研究

鈴 木 美 緒

ヒトR型電位依存性Ca²⁺チャンネルのカルモジ
ュリン調節機構に関する研究

張 楠 楠

脊髄内P2X受容体刺激により惹起される長期
持続性アロディニアに関する研究

中 尾 賢 治

受容体作動性Ca²⁺チャンネルTRPC4/TRPC5の
電気生理的応答差の追究

富士尾 まゆみ

側座核shell内グルタミン酸トランスポー
ター機能調節によるメタンフェタミン依存に
対する影響

山 内 陽 介

アルツハイマー病治療薬ガランタミンの α_7
ニコチン受容体に対するアロステリック増
強作用

山 崎 裕 子

神経細胞傷害時におけるミクログリアの細
胞運動に関する脳組織切片を用いた研究

磯 野 修

HTLV-1 HBZによるプロテアソーム系を介
したc-Jun分解機構の解析

村 田 宗 子

C型肝炎ウイルスゲノム変異体及び欠失体に
おける複製効率の検討

堅 田 亜 由

デキストラン硫酸誘発性大腸炎の発症にお
けるプロスタグランジンE₂による遺伝子発
現変化の解析

高 野 裕 嗣

Altered gene expression during
differentiation of cultured mast cells (骨髄
由来培養マスト細胞の分化に伴う遺伝子発
現変化の解析)

高 橋 祐 子

プロスタグランジンE受容体EP2およびEP3
のGsタンパク質共役における細胞内第2ル
ープ芳香族アミノ酸の役割

土 屋 裕 義

視索前野におけるプロスタグランジン受容
体EP3発現ニューロンの遺伝子発現解析

劉 莹

IgE感作によるマスト細胞活性化応答にお
けるPKCBIIの重要性

中 山 喜 明

眼形成因子としてのFgf19の役割の解析

山 内 肇

造血因子としてのFgf21の役割の解析

水野伸一

脳形成因子としての*Fgf16*の役割の解明

長崎宏俊

Fgfシグナルの脂肪組織形成における役割の解析

中司貴子

機能性リンカーを挿入した亜鉛フィンガータンパク質によるDNAの特異的切断

板津昌子

CH₃型亜鉛フィンガーの創製とその性質について

閻 薇

アルギニンリンカーを有する6-亜鉛フィンガータンパク質の創製

武内敏秀

塩基性ペプチドの細胞内移行における対アニオンと膜電位の影響

平田剛之

15亜鉛フィンガータンパク質の創製とDNA結合性の検討

増井佑美

pH感受性ペプチド添加によるトランスフェクション効率の上昇

伊藤佳孝

Gene Expression and Cytokine Response following Intravenous Administration of Lipoplex and Polyplex (LipoplexおよびPolyplexの静脈内投与後の遺伝子発現ならびにサイトカイン応答の評価)

梅山夕香里

Induction of antitumor immunity by CpG oligonucleotide/cationic liposome complex for inhibition of peritoneal dissemination (免疫賦活型CpGオリゴヌクレオチド複合体を用いた抗腫瘍免疫誘導による腹膜播種性癌転移抑制)

鈴木幸子

Development of differentiation therapy for lung cancer using all-trans retinoic acid incorporated in cationic liposomes (全トラ

ンスレチノイン酸封入カチオン性リポソームを用いた肺がん分化誘導療法の開発)

濱口伸子

Development of delivery system for anticancer drugs based on newly synthesized PEGylated plasmid DNA (新規ポリエチレングリコール修飾プラスミドDNA誘導体の創出による抗癌剤デリバリーシステムの開発)

原 秀人

Novel visualization method of chemical space for prediction of ADME properties (体内動態特性の予測を目的とした化合物特性空間の新規可視化方法に関する研究)

川戸優香

dbcAMPによるSH-SY5Y細胞のノルアドレナリン産生細胞への分化誘導

杉本充弘

中枢性可逆的アセチルコリンエステラーゼ阻害薬によるニコチン受容体のアップレギュレーション

西脇真由美

中脳培養切片における3-nitrotyrosineの神経毒性の検討

野中美妃

大脳皮質神経細胞死における内在性D・セリンの役割

浅野大悟

転移性骨腫瘍の内用放射線治療を目的としたレニウム-186標識ビスホスホネートの開発

梶山聡美

心臓の核医学機能診断を目的としたβアドレナリン受容体結合放射性薬剤の開発に関する基礎的検討

下中紗矢香

放射性ヨウ素標識シクロオキシゲナーゼ-2選択的イメージング剤の開発に関する基礎的検討

伊佐次圭子

Design of plasmid DNA encoding antigen

with controlled intracellular trafficking properties for dendritic cell-targeted DNA vaccination (樹状細胞を標的とするDNAワクチン開発のための細胞内抗原動態制御型プラスミドDNAの設計)

加古慶子

Effects of inflammatory responses on *in vivo* transgene expression following nonviral vector administration (プラスミドDNA投与による炎症性サイトカインの誘導と導入遺伝子発現に及ぼす影響)

河野博樹

Persistent Transgene Expression by CpG Reduction in Plasmid DNA and Enhanced Therapeutic Effect of Interferon Gene Therapy (CpG配列削減による遺伝子発現の持続化とインターフェロン遺伝子治療への応用)

高橋有己

Induction of *in vivo* RNA interference and its application to cancer gene therapy (In vivo RNA干渉の誘導とその癌遺伝子治療への応用に関する研究)

福原祐雅

Analysis of plasmid DNA uptake mechanism and subsequent cellular activation through TLR9-independent pathway in human monocyte-derived cells in primary culture (ヒト末梢血由来単球系細胞によるプラスミドDNA取り込み機構の解析とTLR9非依存的細胞活性化の評価)

井上真由美

癌細胞に発現するヒトペプチドトランスポータPEPT1の抗癌剤5-fluorouracilによる制御機構

木村尚子

血糖降下薬メトホルミンの臓器指向性規定因子としてのOCTの役割に関する研究

西牟田章戸

H⁺駆動型ペプチドトランスポータPEPT1の細胞膜局在化機構に関する研究

道下孝恒

バンコマイシンによる急性腎障害の発症と回復における薬物腎挙動の変動

旧 師 探 訪

残暑まだ残る八月二十三日の火曜日、恩師 富士 薫先生の勤務先広島国際大学と広島のご自宅を訪問致しました。広島国際大学は、新幹線広島駅からJR呉線に乗り継ぎ、新広駅から歩いて10分程度のところにある一見異様な建物でありました。



富士先生は京大を退官後、京都薬科大学客員教授、大塚製薬顧問を経て、昨年四月に広島国際大学の初代薬学部長に着任され現在に至っております。化研時代に建てられた宇治のご自宅と薬学部長就任後の広島の職員宿舎をほぼ毎週行き来されている生活は先生の行動力のなせる業だと感服いたしております。

先生は薬学部長という立場で大変お忙しい中、時間を割いて頂き訪問できました。まず学部長室に訪問し、お元気そうなお顔を拝見できました。また多忙な日常が推察され、以前にも増して一層生き生きと見受けられました。学部長室では、薬学を取り巻く諸問題について話して頂きました。ここ20年間新設がなかった国公立薬学部46校から平成15年に2大学、16年には先生のところを含め7校増え、平成17年には61校になり、薬剤師国家試験受験者増、薬剤師資格者過剰が現実となり、いずれ複数の薬学部が消えるか大幅に定員を減じなければならない問題、また、平成18年度から始まる薬学部六年制問題に直面していることなどについて話されました。

さらに、新制の私立大学では受験者の確保のためオープンキャンパスを開催するのが慣例となっており、年三回大学を紹介するための催しを行っているそうです。私立大学では薬剤師国家試験の合格率が受験者数を始め大学の将来を左右するため、特に注意を払っており、一年次から“薬学へのいざない”と題する講義をされているそうです。

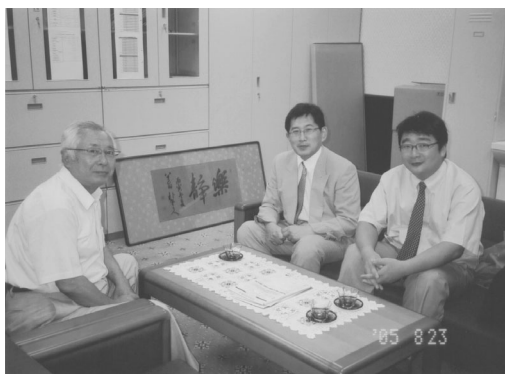
学部長室を出て、校舎内の新しい実習室、講義室、情報演習室、機器分析研修センターや医療薬学研究センターを見学させて頂きましたが、600MHz NMR やトフマス、X線解析装置、円二色性分光計、蛍光励起セルソーター、共焦点レーザー顕微鏡、DNAシーケンサーなど立派な機器が備えられており驚かされました。

最後に教授室と富士研究室を見せて頂きました。その後、職員宿舎を訪問し、奥様お手製のシャーベットをご馳走になりました。さらに広島市内でご馳走頂いたアナゴの刺身は絶品でした。

薬友会の皆様には、富士先生ご夫妻が益々お元気で過ごされていることをご報告し、先生の教え子の皆様には、都合がつけば、先生に一度連絡をとって訪問されることをお勧めします。

(院36回卒 池田 壽文)

(院38回卒 岳 誉泰)



旧 師 探 訪

厳しい暑さの続く8月初旬、恩師 多賀 徹先生のご自宅を訪問いたしました。先生は現在、三重県松阪市に程近い白山町の緑豊かな閑静な住宅にお移りになられています。私達は、勤務先の銚子を出発し、車で10時間ほど高速をひた走りました。松阪は本居宣長の出身地であり、また松阪牛の本場でもあります。気候は温暖でとても過ごしやすいところに思えました。先生と奥様はJR紀勢本線松阪駅まで迎えに来てくださいました。大学にいらしたところとお変わりなく、元気そうな先生のお姿を拝見し、非常に嬉しく感じました。また、奥様も同じ京大薬学部無機薬化学講座ご出身でしたので、私達の大先輩にあたります。

ちょうどお昼頃であったので、先生のご自宅に伺う前に、高級料亭にて松阪牛のフルコースをご馳走になりつつ、お話をお伺いすることになりました。多賀先生はご退官された後、1年間京大薬学部で非常勤講師として精力的にご教鞭をとられ、薬品分子構造学の第一線を退かれました。先生に分子構造学の指導を受けた一人として非常に寂しく感じられました。また学生時代の先生のご指導が懐かしく思われ、まだまだ若い世代にご専門のX線解析についてご教授していただければと思われる次第です。ここ1, 2年の薬学部新設ラッシュに驚かれ、私どもが現在在籍している千葉科学大学の様子もお尋ねになりました。私立大学ゆえの学生の多さに驚かれ、授業や学生実習のことなど京大時代のものと比較しつつお話いたしました。また先生が結晶構造を決定された免疫抑制剤FK506のお話にふれ、「研究というものは己の意欲に基づいて行われるべき。そうでなくては良い成果など生まれるはずがない。」とおっしゃっておられ、お言葉に敬服しつつ、非常に興味深く拝聴いたしました。

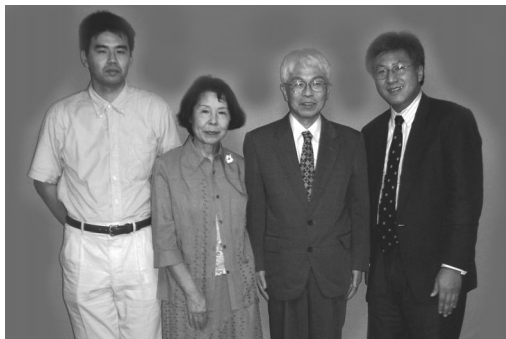
実に楽しく豪華な昼食の後、奥様運転のお

車でお導きいただき、先生のご自宅まで伺いました。到着すると先生が飼われていらっしゃる愛犬が元気に出迎えてくれました。緑豊かなすばらしい環境のもと、先生はご隠居生活を存分にエンジョイされておられるようです。ご自宅の周りの森では、シジュウガラやウグイスなど野鳥がさえずり、夕方にはひぐらしの鳴き声がカナカナと夏の情趣深く、非常に美しく豊かな自然を満喫でき、まるで別荘地のようにうらやましいかぎりでした。また近くには伊勢湾を一望できる青山高原があるそうで、奥様とお二人で山頂にそびえたつ発電所の大きな風車を見に行かれるなどハイキングも楽しまれていると伺いました。

先生とのお話も尽きぬまま、奥様に淹れていただいたお茶とお菓子をご馳走になったのち、再び伊勢道路に通じる県道までお車でわざわざお導きいただき、帰路につきました。お土産にアワビやお菓子などたくさんいただき、あらためて先生ならびに奥様のお人柄に触れた気持ちでした。今回このように先生にお会いして、お元気で過ごしの様子で何よりも嬉しく感じた1日でした。心に残るよい思い出となり、先生と過ごした京大での数々の思い出とともに大切にしたいと思えます。多賀先生と奥様のますますのご健康とご多幸をお祈りいたします。

(45回卒 松本 治)

(61回卒 亀甲 龍彦)



第26回卒業生40周年記念クラス会

1965年（昭和40年）に卒業した第26回卒業生は2005年で40周年を迎えたので、本年6月4日（土）～5日（日）に大津プリンスホテルで記念クラス会を開いた。

我々が卒業した昭和40年は東京オリンピックの翌年であり、高度経済成長の真っ直中であった。東京オリンピックの年に開通した新幹線に続いて名神高速道路がこの年全線開通し、モータリゼーションの花が咲きかけた頃と言えよう。朝永博士がノーベル賞を受賞したのもこの年である。佐藤栄作首相のもと日韓条約が調印された。アメリカの北爆に反対してベ平連が結成されたのもこの頃である。我々の世代はこのような右肩急上がりを経済成長と第一次ベビーブーム前のタイミングで比較的恵まれた世代ではあったと思う。しかし、卒後40年ともなると第一線を退く年頃で、時間的にも少しゆとりができ、青春を思い返すクラス会を開こうと相成った。我々は卒後20年からクラス会を5年間隔で定期的に行っており、最近では5年に2回となっている。

ゴルフなど昼間のオプションを終えた後、大津プリンスホテルに集まったのは32名、ノンビリ宴会からスタートした。途中で、1965年当時の主な出来事や流行歌、スター俳優（加山雄三、吉永小百合が代表的）流行語、流

行ファッション（Ivyルックなど）を紹介したスライドや新装なった現在の薬学部のスライドによる新旧対比が行われた。40年の時間の重みを実感した。学生時代、21世紀に生きることを真剣に考えたことはなかったが、70名の卒業生が2名を除いて健在である。26回卒前後の学年と比較しても平均年齢を考慮しても割合しむとい学年ということになった。

かなり遅くまで痛飲したが、翌朝は二日酔いの頭を叩きつつ8時半に集合し、琵琶湖周遊バスツアーに出かけた。三井寺 延暦寺 近江八幡 京大のコースである。三井寺は44年前大文字山か山科から出発するハイキングコースのゴールとして印象に残っている者もあり、タイムスリップするによい場所であった。比叡山ドライブウェイからの琵琶湖の風情は京大の歴史に重複するものがあり、全員感慨一入ではなかっただろうか。堅田に降りて琵琶湖大橋を渡り、近江八幡の八幡堀周辺を散策、少し腹ごなしをした後、近江牛の毛利志満でやや遅い昼食を摂った。山中峠を越えて懐かしい北白川から京大の時計台に着き、記念写真を撮影、思い出を新たにした。その後、新装なった薬学部を見学（時間の関係で外部からのみ）、21世紀における京大薬学部の発展を祈念して解散した。（奥村記）



京都大学薬学部第26回卒業生同窓会 平成17年6月5日 於 京都大学時計台前

分野(教室)だより

薬品有機製造学(薬品製造学)

薬品有機製造学はいろんな意味での大ボス藤井教授の健在ぶりは相変わらずですが、1月にCOE特任助手の今野先生が京都府立医大講師として移られ、4月に助教授の大高先生が徳島大学へ、講師の玉村先生が東京医科歯科大学へそれぞれ教授として栄転されました。一方、7月からは新しい助教授として大阪大学より大野浩章先生、さらに来る1月からは助手として静岡県立大学より大石真也先生を迎えるなど変化の多い年となっています。DC 5名、MC 9名、4回生5名とその他フランスからのCOEポスドク1名、企業からの研究生1名で総勢24名からなっています。

2000年のヒトゲノムの解明以来、巷ではポストゲノム研究が盛んに叫ばれています。当研究室は、ケミカルバイオロジー、ケモゲノミクス(化学から生物へのアプローチ)の観点から「ポストゲノム研究」を遂行しております。具体的には、1)包括的機能ゲノミクス・バイオインフォーマティクスを活用した創薬標的の化学的同定、2)環状ペプチドをリエゾンとする高分子ペプチド・蛋白質の低分子化および立体配座固定創薬テンプレートへの展開、3)有機金属化学を活用したペプチドの“高活性非ペプチド化”のための精密有機合成手法の確立、4)膜貫通型レセプター構築原理の解明とその動的挙動解析、5)再構成人工受容体系の開発と創薬リードスクリーニングへの活用、という項目に分けてこれらの有機的統合のもとにゲノム情報収斂型創薬研究を推進しています。

研究以外にも春には琵琶湖でバーベキュー、秋には研究室旅行や他大学(大阪大学、大阪市

立大学、大阪府立大学)の研究室との野球大会などイベントも盛りだくさんです。薬品資源学と合同チームで参加した昨年の薬友会野球大会では1勝したものの2回戦で敗退してしまいました。しかしながら有機系合同チームで参加したソフトボールでは圧倒的な強さを見せ、見事優勝(決勝は行われなかったため同時優勝ですが・・・)しました。

国家試験においても当研究室は優れた成績を残しており、今年で6年連続全員が合格するという本学薬学部においてなかなか難しいであろう結果を残しております。今後も10年、20年とこの記録をのばしていってけると信じています。

最後になりましたが、卒業生の皆様、また当研究室に興味のある学部生の方もぜひお気軽に新館5階の研究室にお立ち寄り下さい。

薬品合成化学(薬用植物化学)

本年度の当研究室の構成は、富岡教授、飯田助教授、山田助手、猿渡秘書の職員4名と、研究員3名、DC 8名、MC 7名、4回生2名の総勢24名であります。

研究内容は多岐にわたり、有機合成化学方法論の開拓、触媒の不斉合成反応の設計・開拓、立体化学制御の分子論的基礎の構築と新概念の創出、分子認識を基盤とする分子の高次構造制御化学、抗腫瘍性有機化合物の設計・合成と生物有機化学、生体応答分子の生物有機化学、天然生物活性分子の発見と機能発現の化学、と基礎研究から医薬品開発への応用となるものまで幅広く取り組んでいます。

富岡清教授は非常に教育熱心な先生です。その熱心さゆえに学生とのディスカッション

も長時間に及ぶこともしばしばです。飯田助教教授はとても気さくな先生で、時に四条のいきつけの飲み屋に連れていってくれたりします。山田助手は空いた時間には鉄アレイで体を鍛えるなど、そのあふれんばかりのパワフルさで私たち院生を引っ張ってしてくれます。そんな先生方の指導の下、日夜、実験に勉強にと力量ある有機化学者目指して頑張っています。又、NMR、IR、GC、HPLC、CD、DSC、旋光計などの設備機器も充実しており、非常に研究しやすい雰囲気下であります。また、近頃は海外からの留学生も増えて、日常的に英語に接することができます。

実験だけでなくスポーツにも力を入れており、今年の野球大会では悲願の優勝を目指しています。

年に一度の教室旅行では、カニや伊勢海老などの海の幸を堪能しております。

最後になりましたが、薬友会の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈りいたします。卒業生の皆様、また学部学生の方も、お気軽にお立ち寄りください。

薬品分子化学（有機薬化学）

本年度の薬品分子化学分野は、竹本教授以下、宮部助教、柳田講師のご指導のもと、PD 1名、D2が1名、D1が2名、M2が1名、M1が4名、4回生が2名の計14名という構成になっております。竹本先生、宮部先生共に若くこれからの研究室ですが、夢と情熱と忍耐をキャッチフレーズにした若い活力のある研究室を目指し、少数精鋭で頑張っています。

当研究室の研究テーマとしましては、

1. 金属化合物の特性を利用した高立体選択的な不斉合成反応の開拓
2. 人にも環境にも優しい簡便で効率的な有機合成反応の開発
3. 生物活性天然有機化合物及びその類縁体

の高選択的な全合成研究

4. 機能性複素環化合物の創製と生命現象解明への利用
5. 新規ラジカル受容体の探索とタンデム炭素-炭素結合形成ラジカル反応の開発への利用
6. インジウムを用いた高効率の生物活性化化合物合成

等が挙げられ、こういった研究の成果は、反応と合成の進歩シンポジウム、薬学会近畿支部、薬学会年会等の様々な学会において発表されております。

また各人がそれぞれのテーマを持って日々実験、研究に励んでいる一方で、それ以外に行われる行事も活発であり、新歓、実習打ち上げ、ボーリング大会、院試激励会、院試お疲れ会、忘年会、追いコンほか夏にはバーベキュー、秋には研究室旅行や野球大会、冬にはスノーボードなどが毎年恒例となっております。特に野球大会におきましては、日ごろからキャッチボールをしたり、バッティングセンターに足を運んだり、優勝を目標に頑張っております。さらに、飲みにでかけることもしばしばあり、日々交流をふかめております。

学部学生のかたも当研究室に興味をもちましたら、お気軽にお訪ねください。有機化学は企業において需要がたかく、その習得は非常に価値あるものです。私達と有機化学を学びませんか？またご卒業された皆様もお近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

最後になりましたが、薬友会の皆様のご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げます。

薬品資源学（生薬学）

本年度の薬品資源学分野は、本田教授、伊藤助教、矢倉助手の3名の先生方のもと、6名の院生、5名の4回生、10月からの外国

人共同研究者3名の計16名から構成されています。女性が6名、男性が10名と女性の数も増え賑やかな雰囲気の中、広く快適な環境で研究に取り組んでいます。

現在の当研究室のテーマとしましては、

- 1) ジンコウノキの香気成分についての研究
- 2) シソなどに含まれる精油成分生合成に関与する遺伝子の探索
- 3) 海外の薬用植物及び伝統薬物の調査研究に大別されます。このようにテーマは天然物化学から薬理、遺伝子研究まで幅広い分野にわたっており、これらの研究成果を薬学会、生薬学会などで発表しています。

教室行事としては、新歓などの各種コンパや研究室旅行の他に、山で自然と触れあいながらの植物観察会、薬草園でのバーベキュー、薬草園見学など当研究室ならではの活動も行っていきます。また、薬草園で採れたヤマモモやアンズの実を食べたり、梅の実を使って、梅酒やジャムなどを作ったりと季節の恵みを楽しみながら身近な薬用植物に触れ、それらに親しんでいます。

昨年度の薬友会の野球については、薬品有機製造学分野(藤井教授)と合同チームでの参加となり、ソフトボール大会については有機合同チームでの参加で優勝をしました。ソフトボール大会は本年度も有機合同チームでの参加の予定となりますが、昨年度と同様に本年度も期待大です。

このように本研究室では、研究活動はもちろん、課外活動にも積極的に参加し、充実した研究室生活を送っています。皆様ご多忙とは存じますが、近くまでおいでの際には、総合研究棟5階まで是非お立ち寄りください。研究室一同、お待ちしております。

最後になりましたが、皆様方のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

薬品機能解析学(薬品分析学)

新しい薬品機能解析学分野(薬解)は3年目を迎えました。助手はしばらく不在でしたが、矢野義明博士が5月1日付で着任され、完全に新体制が整いました。矢野助手は、博士課程を卒業したばかりの若き研究者で、今年度の日本薬学会近畿支部奨励賞を受賞されています。その情熱で学生諸君を牽引してくれるものと期待しています。従って、現在のメンバーは、松崎教授、星野助教授、矢野助手、地當秘書のスタッフ4名に、DC2名、MC4名、研究生1名、4回生4名の学生(男性7、女性4)で、総勢15名が総合研究棟内(3階西)で日々研究に励んでいます。

現在の研究テーマは、1) 抗菌性ペプチドの作用機構の解明と創薬への展開(松崎)、2) アルツハイマー病発症機構の解明と予防・治療法の開発(松崎・星野)、3) 膜タンパク質の構造形成原理の解明(松崎・矢野)、4) Gタンパク質共役型レセプター(GPCR)の機能制御法の開発(松崎・矢野)、5) NMRを用いた蛋白質新規構造解析法の開発(星野)です。これらの研究成果は、国内外の学会・シンポジウムでの招待講演や大学院生(若林真樹君)のフィジカルファーマフォーラム総合優秀論文賞受賞など、一定の評価を受けています。また、毎週のセミナーにおいて文献紹介・研究報告・英語プレゼンテーションが行われ、常に活発な質疑応答がなされます。日頃の英語プレゼンの成果を生かし、学生も国際会議で口頭発表をするようにしています。

一方で、実験やセミナーの合間にはコーヒーで一息ついたり、コンパや教室旅行があったりと、研究教育以外の面においても充実した日々を送っています。当研究室のウェブサイト(<http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/yakkai/>)で論文やトピックスなど更に詳しい研究活動情報が御覧になれますので、ぜひアクセスし

てください。最後になりましたが薬友会の皆様の御健康・御多幸をお祈り申し上げます。

構造生物薬学

本年度の構造生物薬学分野は、加藤博章教授、中津助教授、中野助手、本田秘書の職員4名と、博士研究員1名、DC2名、MC6名、4回生2名の総勢15名で研究を行なっています。

本分野は主にX線結晶構造解析という手法を用いてタンパク質の構造を明らかにすることによって、創薬の基礎となる生命現象を解明する研究を行なっています。現在、細胞内には構造生物学的アプローチが手付かずになっている問題がたくさんあります。特に、生体膜中に埋め込まれている生物装置、膜タンパク質については、結晶化が難しいため、構造生物学的な研究から取り残された状態にあります。そこで当研究室では、これらのタンパク質の機能を真に理解するために、以下の3つのテーマ、1) 様々な疾病に関わっているABCタンパク質をはじめとしたトランスポーター、チャネルなど膜タンパク質機能の構造要因の解明、2) ペルオキシソーム膜タンパク質局在化に関わるタンパク質であるペルオキシソムのX線結晶構造解析、3) 立体構造の時分割測定による酵素の触媒作用の構造的起源の解明、を中心に掲げ、X線結晶構造解析によってタンパク質の立体構造を解くための新しい手法を、独自に開発しています。

当研究室の教育方針は、よい意味での「放任主義」です。スタッフの方々は、学生にあれやこれやと指示を与えることはほとんどなく、あくまで学生の自発性に重きを置いています。一步一步自分の頭で考えて研究を組み立てていきたいと考えている人にとっては、とてもよい環境であると言えるでしょう。さらに、昆虫細胞によるタンパク質の大量発現

のための細胞培養室や恒温条件での結晶化が可能な結晶化室、さらに、実験室の装置としては世界最高性能のX線回折装置など様々な実験設備も備えています。この充実した研究環境のもと、学生たちは、各人がそれぞれのテーマを持ち、日々研究、実験に意欲的に取り組んでいます。

本分野は理化学研究所播磨研究所の研究室との交流も深く、ディスカッションをしたり、合同でセミナーを行なったりと、学内にとどまらない幅広い研究活動を行っています。また、新歓コンパ、院試激励会、忘年会、といった教室行事も様々なものが企画され、活気のある研究生活が行なわれています。卒業生の皆様を始め、学部生の方々も、当研究室に興味をもたれましたら是非お立ち寄り下さい。

最後になりましたが、薬友会の皆様のご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げます。

ゲノム創薬科学（薬品分子構造学）

ゲノム創薬科学分野（旧薬品分子構造学・情報薬学分野）では、昨年10月に興水崇鏡先生を講師としてお迎えし、また本年度、助手の勝間進先生が東京大学農学部の助教授職にご栄転されました。教職員以下、DC3名、MC6名、4回生5名、研究員2名、研究補佐員8名、研究生1名、秘書2名の総勢30名で構成され、日夜研究に励んでおります。

当研究室では細胞培養やDNA操作をはじめとした分子生物学的手法に加え、DNAマイクロアレイなど最新の手法を取り入れ、以下のような研究を行っています。

1. ゲノムの包括的解析による新規創薬標的の発見とターゲットバリデーション
2. バイオインフォマティクスによるin silico創薬研究
3. 生体内オーファンG蛋白質共役型受容体のリガンド探索および機能構造解析

4. マイクロアレイを用いた遺伝子発現解析
5. 遺伝子改変動物、病態動物を用いた遺伝子の個体レベルにおける機能解析

一昨年度から引き続き、文部科学省の21世紀COEプログラム「ゲノム科学の知的情報基盤・研究拠点形成プロジェクト」の一員として、研究の更なる充実を図るべく、研究室内では活発な討論が日々なされています。

また、共同研究や技術交換など、他の研究室等とも幅広い交流をもち、互いの向上につとめております。

こうした研究活動の一方で、研究室行事も盛んです。「仕事にはメリハリを」という辻本教授の理念の元、4回生歓迎コンパに始まり、学生実習の打ち上げや院試激励会、忘年会の他、テニス大会や古都・京都の散策などが計画され、お互いの親睦を深めています。

卒業生の皆様をはじめ、学部生の方々も、当研究室に興味をもたれましたら、是非お立ち寄りください。HP (<http://gdds.pharm.kyoto-u.ac.jp>) ではこの他、様々な情報をご覧になれます。最後になりましたが、研究室一同、薬友会の皆様の御健康と御活躍を心よりお祈り申し上げます。

製剤機能解析学・薬品物性学 (薬品物理化学)

製剤機能解析学分野(製剤)は、半田教授、黒田助教授、中野助手の指導のもと、日々研究に励んでおります。半田教授は、学内外の仕事の数多くこなされながらも、アポリポタンパク質の機能解明のため、学生とのディスカッションを大切にしておられます。黒田助教授は、現在主に膜タンパク質と薬物の相互作用について、モデルペプチドと分光的手法を駆使して研究されています。中野助手は、蛍光法を用いて脂質膜の構造評価及びタンパク質との相互作用評価とその製剤学的応用に

力を注がれています。

本分野は現在、博士研究員1名、博士課程1名、修士課程9名、5回生1名、4回生5名、事務補佐員(秘書)1名の総勢21名です。分野の研究は脂質分子の多様な集合構造(ナノ粒子)の構築、界面物性解明、生理学的機能の制御とその製剤への応用を目的としたものです。HDL新生反応をはじめとする脂質-タンパク質相互作用の詳細を、国内外の多数の研究室とも協力し、NMR、SAXS、DSC、SPR、蛍光法や、培養細胞など、多岐にわたる研究手法を駆使して解明しようと努力しております。毎週月曜に行われるセミナーでは、情報、意見交換をしながらお互いに切磋琢磨しています。また、輪読会では学生が主体となって生物物理化学の基礎を勉強しています。そのほか、研究室旅行やコンパ、お花見、花火大会など、教室行事も盛りだくさんです。研究室のホームページ(<http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/seizai>)を御覧頂くと、研究内容や研究室の雰囲気がお分かり頂けるのではと思います。

製剤機能解析学、薬品物性学は薬学研究科の基盤的研究・教育を担う重要な分野であり、その責任が果たせるよう努力しております。薬友会の皆様もどうか気軽にお立ち寄りご指導ご鞭撻下さるようお願いいたします。

生体分子認識学・生理活性制御学 (生物化学)

生体分子認識学分野は、助教授の岡先生、助手の馬先生、DC3名、MC10名、4回生5名、研究員1名、秘書1名の計22名により構成されています。昨年度まで当研究室の教授をされておられました川崎敏祐先生は、平成17年3月を以て、定年退官されました。去る平成17年3月5日、京都ホテルオークラにて川崎教授定年退職記念祝賀会が執り行われ、

お忙しい中、多くの先生方、卒業生の方々のご列席を賜り誠にありがとうございました。あらためて教室員一同、心より御礼申し上げます。川寄先生は現在、立命館大学糖鎖工学研究センターのセンター長をされており、引き続きこの分野でご活躍されておられます。

当研究室は、小堤先生率いられます生命科学研究所システム機能学教室が別講座として分離したのちの現在でも、両研究室間の交流を継続し、コンパや教室旅行・イベントなどを共同で行っています。なお、当研究室は、現在、以下のテーマにて研究を進めています。

1. 神経系ネットワーク形成におけるHNK-1糖鎖の役割に関する研究
2. 糖鎖シグナルを介する生体防御メカニズムに関する研究
3. 糖転移酵素の構造と機能に関する研究
4. 小型魚類を用いた糖鎖関連遺伝子の役割に関する研究

研究に必要な機械類はかなり充実しており、「あと用意するものはやる気だけ」という環境で、みんな日夜遅くまで実験に励んでいます。

何にでも全力で取り組むのが好きな学生は、実験以外にも薬友会の野球大会・ソフトボール大会や有志が集まって行われるフットサル・水泳の練習などのスポーツイベント、そして何かとかこつけて行われる飲み会などに対しては全力で打ち込んでしまうため、翌日筋肉痛にうめいたり羽目を外して酒につぶれる人もちらほら見られます。

夏の花火やサッカー観戦、冬の教室旅行や川寄研同窓会などイベントには事欠きません。このように楽しいメンバーが揃っているのでOB & OGの方々、お近くに来られた際には是非当研究室にお立ち寄りになって、近況や昔の話など楽しいお話をお聞かせ下さい。最後になりましたが、薬友会のみなさまのご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げます。

分子微生物学（微生物薬品学）

ここ数年教官（3人）および職員（秘書）に変更はない。大学院生は修士課程8人（M1生3人，M2生5人）。4回生の特別実習は4人で、本年の教室員としては合計16人。院生には中国からの留学生2人が含まれる。他の研究室は昨年までに新棟あるいは改修後の研究室に移転が完了しているが、当研究室は薬学部の予算不足のために（薬学部の2億円の予算を10%節約すれば可能な措置ではあるが）研究室の改修が進まず、不本意ながら本年も実質的な研究活動は未改修の旧実験室で行っている。

微生物学担当の研究室ができてから21年が過ぎたが、この間の研究課題は一貫して狂犬病ウイルスを対象あるいは材料とした基礎生物学的研究が中心となった。狂犬病は不安の強い急性脳炎で、人患者の場合発病後4、5日以内にほぼ100%が死亡するため、その治療法の確立を遠い目標として、とりあえずは本ウイルスの複製に関わる5種類のウイルス蛋白質の構造と機能の詳細を明らかにすることにより本ウイルスの“アキレス腱”を見出すことを当面の目標に基礎的研究を行ってきた。また、このウイルスのもつ特徴を生かして細胞生物学分野にも多少の貢献ができ、未発表の成果を含めて、使用した研究経費の割には成果が上がっているように思われる。特に、本ウイルスが持つ特徴を生かした研究成果として、例えば、細胞骨格系の機能と関連する膜蛋白質の同定にも狂犬病ウイルス粒子の生化学的研究が大いに役立ち、またその成果が逆にウイルス粒子形成過程の解明にも役立ちつつある。さらに、最近は少数の抗体分子の結合によるウイルス中和の仕組みとして新たなドミノ仮説を提唱した。

最近はワクチン業界側からの要望により応用的研究にも心がけ、高価な狂犬病ワクチン

の性能向上とコストダウンをめざした研究を行い有効な改良案を提案するに至っている、特に、ウイルス中和抗原となる糖タンパク質のコンフォメーションと機能との関連性を認識する抗体を作成することができ、ワクチンの性能についての試験管内評価法を確立するに至っている。また、昨年は水疱性口内炎ウイルスの糖タンパクをコートしたリポソーム(virosome)をモデルとして、理論的に最も優れた遺伝子導入法の確立に若干の貢献ができたが、本年はこの基礎の上に改良を加えて、他のウイルスのタンパクでコートしたものを作成する試みを行っている。

この20年間の学生の指導に当たってはチームワーク制をとらず、どの学部生、院生にも独立した個別の研究課題と取り組んでもらうことにした。自分の工夫により問題を解決し新しい展望を開く力をつけてもらうことを目標とし、論文数よりも既成概念にとらわれない院生の自由な発想により出てきたアイデアを育てることを第一としてきた。なお、当研究室の主任教官は明年3月で退官の予定で、これまでの研究成果の一部は、明年の2月に予定されている最終講義において報告されることになる。

生体機能解析学(分子作用制御学)

本年度の生体機能解析学は、南雅文先生が2005年4月1日付けで北海道大学薬学研究所薬理学分野教授にご栄転になったことや、中川貴之助手が7月1日付けで助教授にご昇任されたことをうけ、アウトドア派でとても気さくな金子周司教授のもと、まだまだパワフルな中川貴之助教授、ポスドク1人、DC2人、MC10人、卒研究生5人、研究生2人に秘書1人を加え、計23人が、薬学部本館2階で、賑やかに研究生活を行っています。

本研究室は昨年、生体機能解析学分野と医

療薬理学分野が合併しましたが、どちらの分野も以前から中枢神経系での薬物の作用メカニズムを解明するためにさまざまな手法を用いた研究を行っており、現在は、

- ・電位依存性および受容体依存性カルシウムチャンネルに関する電気生理的および分子生物学的研究
- ・薬物依存形成・禁断症状発現のメカニズムおよびその制御に関する研究
- ・中枢神経系における痛覚情報伝達・制御に関する研究
- ・脳内サイトカイン・ケモカインによるグリア・ニューロン機能連関の時間的・空間的調節機構の解明に関する研究

を主要テーマとして日夜(特に夜?)実験に励んでいます。(当研究室のウェブサイト<http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/channel/ja/index.html>で詳しい研究活動情報をご覧いただけますのでぜひアクセスしてください。)また、薬品作用解析学分野とは元々薬理学講座という1つの講座から派生してきたこともあり、さらに昨年4月にできた創薬神経科学講座とも親戚関係にありますので共同研究も多く、それらの分野の先生方からご指導を受けるなどますます研究に熱が入っています。

教室員は明るく楽しい人ばかりで、このように研究に真摯に取り組む一方で教室行事にも力を抜くことなく、新歓コンパ、教室旅行といった公式イベントでは趣向を凝らした企画作りにも余念がありません。またこのような公式イベントの他にも、四回生院試激励コンパ、院試お疲れさまコンパ、バーベキュー、夏の海水浴や冬のスキー旅行、突然の飲み会などが企画・実行されています。

本研究室は個性あふれるメンバーが揃っており、日々の研究活動の合間にも笑いとお話絶えません。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄り下さい。皆様のお越しを教室員一同心待ちにしております。

最後になりましたが、教室員一同、薬友会の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

遺伝子薬学（遺伝子薬品学）

当研究室は今年度で開設13年目を迎えました。現在、遺伝子薬学分野は、伊藤教授、三宅講師、小西助手、DC 7名、MC10名、4回生以下5名、合計25名という構成です。昨年度には薬学部校舎の改修に伴い本館2階へ引っ越し、先生方の厳しくも心温まるご指導のもと、皆日々研究にいそしんでおります。

現在の当研究室の研究テーマとしては、

- 1) 遺伝子探索法による新規細胞間シグナル分子の探索と発現様式の解明
- 2) 新規細胞間シグナル分子の生体内代謝調節における役割の解明
- 3) 新規細胞間シグナル分子の発生・分化における役割、及び形態形成の分子機構の解明
- 4) ゼブラフィッシュにおけるFGFおよび細胞間シグナル分子の探索と機能解析
- 5) FGFおよび細胞間シグナル分子の遺伝子欠損マウスの作成とその解析

が挙げられ、こういった研究の成果は分子生物学会、薬学会を初めとし、アディポサイエンス、小型魚類研究会等の様々な学会において発表されています。

学生たちは皆熱心に研究に励んでおりますが、研究に明け暮ればかりいるわけではありません。当研究室では、新歓コンパ、院試激励およびお疲れ様コンパ、教室旅行、クリスマス会、忘年会、追い出しコンパといった各種公式行事に加え、お花見、パーベキュー、スキー旅行といった、有志による楽しい企画が目白押しで、皆、何ごとにも真剣に取り組むことの大切さを忘れることはないようです。

また、最近はスポーツ熱もますます高まっ

ています。昨年の薬友会野球では、「俺流」野球によって、またまた1回戦突破を果たしました。今や遺伝子野球部は押しも押されぬ名門となり、更なる飛躍を目指しているのです。

このように、遺伝子薬学分野は、益々活気に満ちた研究室となっておりますので、卒業生の皆様はじめ、当研究室に興味を持たれた方、お気軽にお立ち寄り下さい。

最後になりましたが、薬友会の皆様のご健康と更なるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

生体情報制御学（衛生化学）

本年度の生体情報制御学分野は、中山教授、杉本助教授、田中助手の御指導のもと、DC 7名、MC 11名、4回生4名、研究員2名、秘書1名の総勢28名で構成され、日夜研究に励んでおります。

当研究室では、ゴルジ体を中心としたタンパク質の細胞内輸送および局在化の機構の解析、プロスタグランジン受容体の解析、ヒスチジン脱炭酸酵素の解析という3つのテーマをもとに研究を進めております。また、毎週のセミナーを通じて、意見を交換しあい、教室全体で研究を進めるように努力しております。

研究だけでなく教室行事も盛んで、春のお花見に始まり、新歓コンパ、院試激励会、院試打ち上げコンパ、教室旅行、追いコンなど、事あるごとに皆で親睦を深めています。メンバーは個性に溢れていますが、皆に共通なのは「何事においても真剣に」であり、研究はもちろんのこと遊びにおいても真剣です。我々のモットーは「よく学び、よく遊べ」であり、飲み会などでは、先生方も学生に混じって、よく遊んで下さいます。そこで、エネルギーを蓄え、日々の実験に爆発させるとい

った次第です。普段の教室の雰囲気はとても自由で明るく、笑い声が絶えません。しかし、各実験にはやはり真剣に取り組み、時には先生方の厳しい指導のもと、めりはりのある研究生活を送っております。そして、忙しい中にもやりがいを感じながら、目標に向かって邁進しております。

卒業生の皆様をはじめ、当研究室に興味を持たれた方、どうぞお気軽にお立ち寄り下さい。最後になりましたが、研究員一同、薬友会の皆様方の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

薬品動態制御学（薬剤学）

本年度の薬品動態制御学分野（旧薬剤学教室）は、橋田教授、山下助教、川上助手の教員3名、Post Doc 2名、外国人共同研究員2名、DC 11名（うち外国人留学生4名）、MC 12名（うち外国人留学生3名）、4回生5名、特別聴講生1名、秘書2名で構成され、総勢38名の大所帯が日夜研究に励んでおります。

橋田教授は、国際薬学連合（FIP）副会長、日本DDS学会理事長などの要職を務められ、今年はCRS Founders Award、日本薬学会賞を受賞されるなど、国内外で幅広く活躍しております。また、本年度も引き続き薬学部長・薬学研究科長としてお忙しい毎日をご過ごしております。

当研究室の研究内容は、タンパク医薬品や遺伝子医薬品など単独の投与では効果的な薬効を発現することが難しい薬物に対し、肝臓、肺、癌など臓器/組織レベルでの送達を目的としたシステムの開発を進めるとともに、経皮、消化管吸収のコンピュータ予測も行っております。これらの研究成果は、薬学会、薬剤学会、薬物動態学会、DDS学会といった国内学会のみならず、CRS学会、FIPなどの国際学会で多数発表されております。また、多くの製

薬会社の皆さんが集まる経口投与製剤勉強会が数ヶ月毎に開催され、製剤に関わる企業研究者の方々にお話を聞かせていただく機会もあります。

教室行事は春の新歓コンパに始まり、夏の他大学との合同サマーセミナー、秋の阪大薬剤学教室との交流会、研究室旅行、年度末の追い出しコンパなど多数行われ、いつもはお忙しい先生方も交えて、大いに盛り上がります。また、ほとんどの行事を病態情報薬学教室と合同で行い、総勢60名もの旧薬剤学研究室のメンバーでお互いの親睦を深めております。昨年の薬友会野球では、先生方のご活躍にもより、久々のベスト4進出を果たしました。今年も新戦力を加えて昨年以上の順位を目指しています。

新棟の研究室に移ってから2年が過ぎ、この新しい研究室にも馴染んできました。橋田教授が研究科長をなさっていることもあり、国内外から多数の来訪者をお迎えしております。卒業生の皆様もお時間がございましたら是非研究室にお立ち寄りください。また、当研究室に興味を持たれた方のお越しもお待ちしております。

最後になりましたが、薬友会の皆様方のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

薬品作用解析学・医療薬理学 (薬理学)

本年度の薬品作用解析学分野は赤池教授、香月助教、久米助手のご指導のもと、DC 4名、MC12名、4回生5名、秘書1名の総勢25名より構成され、日々研究に励んでいます。当分野は以前から生体機能解析学分野や医学部、さらに創薬神経科学分野との共同研究が多いため、研究室は活気に満ち溢れ、互いに切磋琢磨する中で研究に勤しんでいます。

現在当研究室では、「中枢神経疾患における

ニューロン死の機序とその保護因子に関する研究」「当研究室で発見された新規神経保護物質『セロフェンド酸』に関する研究」「ガス状生理活性物質である一酸化窒素の脳細胞選択死における役割の解明」「虚血性網膜障害の機序の解析と治療薬の探索」等についての研究が日々進められており、これらの研究成果は薬理学会、薬学会、神経科学会等の様々な学会において発表されています。

こうした研究活動の一方で教室行事も盛んで、生体機能解析学、創薬神経科学分野と合同で行われる新歓コンパ、教室旅行、追い出しコンパの三大イベントを筆頭に、その他にも院試激励コンパ、院試打ち上げコンパ、野球、サッカー観戦などのイベントが数多く行われています。また、スポーツ好きな人も多く、野球、フットサル、テニスなどのスポーツが盛んに行われています。その他にも飲み会、バーベキュー、たこ焼きパーティーなどが随時企画され、研究の合間に和気あいあいと行われています。

このように教室員一同、学ぶ時は真剣に研究し、遊ぶときは一生懸命遊ぶという何事にも熱心な研究室生活を送っていますが、卒業生の皆様も機会がございましたら是非教室の方へお立ち寄りください。最後になりましたが、薬友会の皆様の御健康と益々の御活躍を心よりお祈り申し上げます。

病態機能解析学（放射性薬品化学）

本年度の病態機能解析学分野は、佐治教授、久下助教、天満助手、特別研究員として、京大病院助手の清野先生、河嶋先生、府立医大助手の上田先生の御指導のもと、DC 3名、MC 9名、研究生 1名、4回生 5名、秘書 1名、合計 25名という構成で各自研究に勤しんでいます。

本教室は病院の医療用サイクロトロンによ

る核医学臨床診断の実施責任を負うなど医学部の臨床部門と密接な関係を持ちながら、インビボラジオトレーサー法を利用した脳神経伝達機能、脳虚血性疾患、心疾患の病態画像解析と新規放射性薬剤の創製、癌の診断・治療薬剤の開発、生理活性金属錯体の医薬品への応用などについて研究を進めています。また、動物用PET、SPECT、MRIを用いた新しい生体機能解析法の基礎的探索などについても研究し、有益な成果があがるよう日々努力しています。

一方、教室行事も盛んに行われており、5月の新歓コンパに始まり、院試激励コンパ、院試お疲れコンパ、薬友会の野球、ソフトボール大会、教室旅行、忘年会、新年会、追いコンと色々な行事が盛りだくさんです。

本教室は人数も多い上に個性あふれるメンバーが揃っており、毎日が大変活気のあるものとなっています。本教室卒業生の皆様、お時間がございましたら是非ともお立ち寄りください。

最後になりましたが、教室員一同、薬友会会員の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

病態情報薬学

病態情報薬学分野は高倉教授以下、山岡助教、西川助教、学生は現在DC 4名、MC10名、4回生 5名の総勢22名から構成されています。平成9年に開設された当初は少人数でしたが、徐々にメンバーも増えにぎやかにやっています。2003年に入ってからには新校舎へ移転し、気持ちも新たに研究生活を送っています。

現在の研究テーマは、DNAワクチン及び抗原ペプチドの体内/細胞内動態の最適化による免疫反応の制御、プラスミドDNAなどの遺伝子医薬品の細胞取り込み機構や体内動態を支

配する分子機構の解明、RNA干渉を目的とした核酸医薬品のin vivoデリバリー、極性細胞からの生理活性タンパク分泌方向性の解明と制御などで、各メンバーは24時間体制で日々実験を行っています。学会活動も活発で、国内外を問わず多数の学会で発表しています。また発表論文数も徐々に増加しています。その他毎週行われるセミナーでは学生たちからも遠慮なく質問が飛び交い、非常に活発なものになっています。

薬品動態制御学分野と合同で行われる教室行事は、春の新歓コンパに始まり、夏には他大学との合同サマーセミナー、秋の他大学との交流会、冬の教室旅行、追い出しコンパなど多彩で、総勢約60名にもなる大人数で毎回大いに盛り上がっています。また、当研究室では野球も盛んで、秋に行われる野球大会では昨年、ついに念願の優勝を果たしており、今年も昨年よりさらに充実した戦力で連覇を狙っています。女子のソフトボールも上位進出を狙って頑張っています。

なお、当研究室ではホームページ (<http://dds.pharm.kyoto-u.ac.jp/biopharm/>) も設けていますので是非御覧ください。卒業生の皆様、機会がございましたらぜひお立ち寄り下さい。研究室一同お待ちいたしております。最後になりましたが、薬友会の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

創薬神経科学

創薬神経科学講座は、2003年4月に開設されたエーザイ(株)による寄附講座です。杉本教授以下、新留助教授、木原講師、DC4名、MC4名、4回生2名、教務補佐員、技術補佐員、秘書の16名と、この2年間で大所帯となりました。各人のバックグラウンドも多彩で、出身学部は薬学部にとどまらず、理工学部、理学部、医学部と様々です。賑やかに多種多

様な考え方・技術を出し合いながら、熱心に研究に励んでおります。

本講座の研究テーマは、

1. アルツハイマー病に代表される神経変性疾患の病因・病態解明に基づく創薬研究
 2. 生体内物質や天然物の中から創薬シードとなり得る生理活性物質の探索
 3. ゲノムや神経再生医療技術を駆使した創薬アプローチに関する研究
 4. アセチルコリンエステラーゼ阻害薬が示す神経保護効果の機構解明に基づく創薬研究
- などに関する研究を進めております。研究成果は出始めており、学会・論文発表、あるいは臨床応用の開始を予定しています。

当研究室は「薬品作用解析学」「生体機能解析学」「医療薬理学」をはじめとして、「工學部分子生物化学」「医学部神経内科」「医学部生体構造医学」や東京工業大学をはじめとする他大学、「製薬企業」などと共同研究を行っています。多方面からの視点で研究を行い、基礎研究はもちろんのこと、患者治療につながるような社会に還元できる研究をも目指しています。

他方、教室行事も盛んで、「薬品作用解析学」「生体機能解析学」「医療薬理学」と合同で開催される新歓コンパ、夏には院試激励コンパ、冬の教室旅行、追い出しコンパなどで、大いに盛り上がります。他にもバーベキューやたこ焼きパーティーなどもあります。

学部学生の方々をはじめ、当研究室に興味をお持ちの方は、お気軽にお立ち寄り下さい。最後になりましたが、教室員一同、薬友会会員の皆様のご健康と更なるご活躍をお祈り申し上げます。

医薬品理論設計学

本講座は2005年8月で3年目を迎えました。昨年度初めて配属になった4回生二名は無事

卒業し、今は大学院生（M1）として日夜研究に励んでいます。また、本年度も二名の4回生が研究室の一員となり、張り切って研究してくれています。両名とも大学院進学を希望しており、来年度には大きな戦力となって成果をあげてくれるものと期待しています。昨年の10月からは企業からの研究生一名を受け入れ、現在、教員3人を含め総勢8名となり、少ない人数ながらも活発に研究を進めています。

講座のメインテーマは、薬物標的蛋白質とそのリガンド分子とのアフィニティー（結合自由エネルギー）を計算化学的に精度よく予測する手法の開発です。私たちはフラグメントMO法による蛋白質の量子化学計算や分子動力学シミュレーション手法などを駆使して、世界があっと驚くような方法を目指しています。また、アフィニティー予測には切り離せない溶媒効果の取り扱いに関しても独自の手法を考案し、その有効性を検証しているところです。それぞれの研究課題で面白い結果が出始めており、今後続々と学会・論文での発表を予定しています。

日々の研究活動の中では、研究報告会やセミナーを毎週開催して研究情報のアップデートを行なっています。またその合間には、飲み会やお誕生日会（ケーキを食べる口実）、ハイキングなども行なっています。昨年は大文字山に登り、研究室旅行では金毘羅宮の石段に登りと、研究同様上昇志向？がとても強いようです。今年は鞍馬山か比叡山あたりになるでしょうか。

このように、小所帯ですが和気藹々とやっていますので、本研究室にご興味のある方はお気軽にお立ち寄りください。また、昨秋、講座のホームページの公開を行ないましたので是非アクセスしてください（<http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/theodd/>）。最後になりましたが、薬友会の皆様のご健康とご活躍をお

祈りいたします。

医療薬剤学（医学部附属病院薬剤部）

医療薬剤学分野は医学部附属病院薬剤部に属する研究室です。薬学教育6年制という歴史の変革がいよいよ目前に迫り、薬剤師をはじめとして薬学出身者には医療人としての社会貢献が求められます。薬剤部では1)先進医療を支える薬剤業務・運営に日々奔走しながらも、2)高度な専門性を有する優れた人材の育成と3)真に医療に貢献する先端研究を実践すべく、各スタッフが業務並びに教育・研究のすべてをこなす多忙な毎日を送っています。

研究室には薬学研究科と医学研究科の学生が所属しています。本年度の構成は、乾教授、桂助教授、増田講師、寺田助手、本橋助手、上井助手、COE特別研究員1名、DC6名（うち医学研究科1名）、MC9名、4回生5名、研究生2名、秘書1名の総勢30名です。薬物動態の観点から医薬品適正使用に貢献することを一貫した目的として、薬の有効性・安全性について基礎から臨床まで幅広く研究を展開しています。具体的には薬物の体内動態に直接関わる消化管、肝臓、腎臓のトランスポータに焦点をあて、機能特性や制御機構について分子・細胞生物学的な解析を行っています。さらに薬物動態の個人差に関与する遺伝子や変動因子の探索、個別投与と設計法の構築など基礎研究の成果を臨床へフィードバックするための研究を進めています。これらの成果が高く評価され、本年3月に増田講師が日本薬学会奨励賞を、11月に矢野副薬剤部長が日本薬物動態学会奨励賞を受賞しました。薬剤部のホームページに研究・教育に関する内容を掲載しておりますので是非一度ご覧下さい（<http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp/~yakuzai/main.htm>）。また興味を持たれた方は研究室に

もどうぞお気軽にお立ち寄り下さい。

本年度は11月28、29日に芝蘭会館にて「第27回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム(日本薬学会主催)」を開催致します。外国人招待講演者を含むトップレベルの研究者が集う、実りの多いシンポジウムになるよう万全の準備を進めています。また平成18年7月8、9日には「第9回日本医薬品情報学会総会・学術大会」を国立京都国際会館において開催致します。皆様の御参加を心よりお待ちしております。

生体機能化学 (化学研究所・生体反応設計研究部門)

宇治川のほとり、四季折々の豊かな自然に囲まれた化学研究所内に我々の研究室があります。2005年3月に杉浦幸雄先生が定年退官され、4月1日付けで二木史朗先生が教授に昇任されました。杉浦先生は前年度の日本薬学会副会頭に引き続き、今年度は会頭としてご活躍されています。今年度の我が研究室のスタッフは教授の二木先生、助手の今西未来先生をはじめとして、PD2名、DC3名、MC5名、四回生1名、秘書1名の総勢14名から構成されています。

本研究室は細胞という舞台上で機能を発揮する生理活性タンパク質・ペプチドの創出(In-cell molecular choreography)を目指した以下のテーマを中心に研究を進めております。

1. 細胞機能・遺伝子を制御する生理活性蛋白質の創製
2. 細胞膜透過ペプチドベクターの開発とメカニズム
3. 亜鉛フィンガー型転写因子のDNA認識と機能解析
4. ペプチド工学的手法を用いた環境応答型機能性ペプチドのデザイン

これまでの化学、生物学の枠にとらわれる

ことなく、化学、生化学、分子生物学的手法を用いて生体分子の機能解明・機能創出に向けた研究を行っております。

教室行事といたしましては、春には化研新歓コンパ、教室新歓コンパに始まり、化研スポーツ大会、夏には化研涼飲会、院試お疲れさまコンパ、秋には薬友会野球大会、化研スポーツ大会、教室旅行、冬には忘年会や追い出しコンパなど、いろいろな行事で盛りだくさんです。また、有志によるポーリングや野球、飲み会、スキーツアーなど学生同士の交流も活発で、研究の合間に和気あいあいと楽しく過ごしております。

このように教室員一同、研究に、交流にと活気あふれる毎日を送っております。本研究室の卒業生の皆様をはじめ、本研究室に興味をもたれた方など、いつでもお気軽にお立ち寄りください。

最後になりましたが、教室員一同、薬友会の皆様のご健康と更なるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

精密有機合成 (化学研究所・有機合成基礎研究部門)

京阪電鉄あるいはJRの電車で揺られること数十分、都会の喧騒を離れ出したところに当研究室のある宇治キャンパス・化学研究所が見えてきます。ここ宇治キャンパスは青々とした緑をはじめ四季折々の豊かな自然に囲まれており、その中で我々は毎日活発に研究をしています。

当研究室では空手をはじめ様々なスポーツを得意とする川端教授、音楽等趣味多彩な椿助教授の体制の下、以下の研究を行っています。

- 1) 動的不斉制御の方法論と不斉反応への利用
- 2) 有機触媒による反応制御

3) 分子のキラリティーに基づく高次構造制御

4) 分子認識および超分子化学に関する研究

5) 生物活性化合物の創出を指向した新規合成法の開発

研究室のメンバーは、質量分析の寺田技官をはじめとする、秘書1名、PhD3名、DC6名、MC6名、4回生1名の総勢20名で構成されており、それぞれ個性的な人ばかりです。

研究室の年間行事は、新入生歓迎コンパや涼飲会など化学研究所内でのイベントに加え、バーベキュー、研究室旅行、新年会や忘年会と銘打った飲み会多数があります。また、飲み会だけでなく化学研究所内のスポーツ大会にも積極的に参加しており、最近「古豪復活」を合言葉に特に力をいれております。

実験に関しては、当研究室では専属のNMRを一台持っているので、実験をスムーズに行うことができます。実験以外に関しても、今までの本読みセミナーに加え、計算化学演習など将来を見据えた幅広い知識を得ることができます。

このように、精密有機合成分野は益々活気に満ちた研究室となっておりますので、卒業生の皆様はじめ、学部生の方々も当研究室に興味を持たれた方、どうぞお気軽にお立ち寄りください。最後になりましたが、研究室一同、薬友会の皆様の御健康とさらなる御活躍を心よりお祈り申し上げます。

生命知識システム学

(化学研究所・バイオインフォマティクスセンター)

本分野は21世紀COEプログラムの一環として新設された協力講座です。研究は主に宇治キャンパスにある化学研究所バイオインフォマティクスセンターで行われ、学部学生の受け入れはありませんが、薬学研究科および理学研究科の大学院生の受け入れを行っています。

当研究室は金久實教授、五斗進助教授、服部正泰助手、青木聖子特任助手、伊藤真純特任助手、PD7名、薬学研究科DC1名、理学研究科DC11名、理学研究科MC7名、研究員等4名、秘書3名より構成されています。その他に当研究室が中心となって開発しているKEGGデータベースに係る技術員や研究補助者が17名、システムエンジニアが6名在籍しており、総勢61名が宇治キャンパスを舞台に日々研究業務や勉学に勤しんでいます。また、当研究室を主宰する金久教授は東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター教授も兼任しており、現地には講師1名、助手3名、技官1名、KEGG開発メンバー7名、秘書1名の総勢13名が在籍しておりますので、両拠点を合わせると金久研の構成人員は総勢74名に上ります。これら京大化学研究所、京大薬学研究科、そして東大医科学研究所の間には、最新のテレビ会議システムが導入されあたかも一体化された研究室として運営されています。

研究内容についての特徴としては、他の研究室と異なりドライであること、すなわち分子生物学的な実験(ウェットな研究)ではなく計算機を用いた実験や解析を行っていることです。従って当研究室の研究設備は、超並列型スーパーコンピュータからパソコンに至るまでコンピュータ関連の機器しかありません。バイオインフォマティクスの大学院向けコースは日本にもいくつか存在しますが、情報科学系の研究領域の一部として設置されることが多く、当研究室のように生命科学系の研究科の一部として設置されるのは珍しいことです。研究内容もアルゴリズムの改良や数学的な手法の提案に留まらず、その手法を通して如何に生物学的意義のある結論を導き出せるかが最重視されています。このような環境の下、最近の潮流の一つであるケモゲノミクス研究の一環として、低分子化合物や糖鎖の構造および機能解析が行われ、国際的にも高い評価を

得ています。その他にも、DNA配列やアミノ酸配列の生物種間比較をゲノムスケールで行う解析や、タンパク質立体構造やRNA2次構造とそれらの分子が示す機能との相関解析、また主に代謝パスウェイを用いたネットワーク解析や計算機シミュレーションなど、常に最先端の研究が行われています。これら研究内容についての詳細については、京大化学研究所金久研究室 (<http://kanehisa.kuicr.kyoto-u.ac.jp>) のホームページでご覧頂けます。

年中行事としては、春の歓迎会、夏の涼飲会(化研行事)、秋の遠足(パーベキュー)、冬のクリスマスコンサート(金久研恒例のイベント)、そして新年の追い出しコンパなど、楽しい行事が目白押しです。また化学研究所内での各種スポーツ大会では近年目覚ましい成果を挙げつつあり、後輩たちにはさらなる飛躍が期待される所です。一方、研究室員が関係する主な国際・国内学会としては、ゲノム情報国際会議、ISMB(Intelligent Systems for Molecular Biology)、PSB(the Pacific Symposium on Biocomputing、例年ハワイで開催)、日本分子生物学会年会、日本生物物理学会年会などがあり、いずれも積極的に参加することが推奨されています。また、米ポストン大学および独フンボルト大学との連携教育プログラムの一環として開催される国際ワークショップにも、特に若手を中心に積極的な研究発表が望まれています。さらに同連携プログラムでは、希望するDC学生についてポストン大学またはフンボルト大学へ3ヶ月間の短期留学を支援する体制も整えられ、国際的な視野を持った人材育成が率先して行われています。ラボ内のセミナーについても、テーマがきめ細かく設定されるなど、計算機や分子生物学に不慣れな新入院生が無理なく一線級のバイオインフォマティクス研究者となるよう、万全の教育体制が敷かれています。

薬学研究科では珍しいドライな分野である

ため少々違和感を持たれるかもしれませんが、ラボメンバーの多くは実はウェットな研究室の出身であり、研究室での会話もそれほど特殊な(サイバーな)わけではありません。この記事を読み、研究内容や研究室そのものに興味を持たれた方は、宇治にお越しの際には是非一度お立ち寄りいただければ幸いです。

腫瘍ウイルス薬品学(ウイルス研究所)

本研究室は薬学部の南に位置する病院西地区内ウイルス研究所新館2階にあります。薬学研究科以外にも医学研究科、生命科学研究科からも様々な経歴を持った人が配属されており、薬学部とは異なった雰囲気が漂っています。われわれのラボは下遠野教授、土方助教教授、渡土助手、PD3名、薬学研究科DC3名、薬学研究科MC2名、生命科学研究科DC2名、生命科学研究科MC2名、医学研究科DC3名、技官2名、実験補助員3名、秘書2名から構成されています。人数が比較的多く実験機器も置かれているためスペースは狭いですが、実験に必要な道具は充実しており研究環境としてはかなり恵まれています。

ボスである下遠野先生は3つの研究科を掛け持ちしておられるだけでなくウイルス研究所の所長までこなされていて大変お忙しい中、学生に対しては実験に関する指導を非常に丁寧になさっています。また、運動のお好きな先生で週末に時間を見つけてはよく学生を誘ってはテニスに行かれます。そのためもあってか本研究室では運動が盛んであり、土方先生もソフトボール大会ではエースとして活躍されています。今年は惜しくも準優勝でしたが来年に向けて雪辱に燃えています。

研究内容は分子生物学的手法を用いて主にHCV、HTLVといった人に対して癌を引き起こすウイルスを様々な観点から研究しています。これらの研究成果は週に1度月曜日にその名

も月曜会と呼ばれる小グループに別れた小セミナーで議論されます。また、木曜日にはこれまでの詳細な進行状況を3人ずつ報告するwork conference、水曜日には自分が興味を持った文献を紹介するjournal clubがあります。

これらの他にも大小様々な研究室行事があり、主なものを紹介すると研究室内新人歓迎会兼バーベキューパーティーに始まりウイルス研究所新人歓迎会、カレーパーティーなどが企画されています。このような時は普段の研究に対する情熱を忘れ、実験が上手くいっている人はもちろん上手くいっていない人も皆で楽しんでいます。

以上が本研究室の簡単な自己紹介でしたが、薬学部との関りが薄く皆さんになじみがないと思われる。残念ながら今年で学生の募集を停止してしまい、御一緒に研究する機会は失われてしまいました。しかし我々の分野に興味があれば遠慮なく訪れて下さい。参考になるかどうかはわかりませんが先輩方が研究について熱く語ってくれます。最後になりますが、薬友会のさらなる発展をお祈りしています。

生命科学研究所・生体システム学

本研究室は平成11年度より薬学部から生命科学研究所に移籍し、「生体システム学分野」と改称しました。現在は根岸教授、加藤助教授、DC7名、MC5名、四回生3名、秘書1名の総勢18名により構成されています。

この春、研究室の所在地が薬学部本館4階から医学部構内に新築された医学・生命科学総合研究棟1階に移転しました。これにより、かねてからの悩みであった部屋の狭さは解消することとなり、一同新たな気持ちで日々の研究に励んでいます。

本研究室の具体的な研究内容としては、

(1) Gタンパク質による細胞、特に神経細胞に

おける形態調節機構

(2) 神経における軸索ガイダンスや可塑性成立の分子メカニズム

等を解明することを目標としており、最終的には細胞内情報伝達系の普遍的なシステムを分子レベルで明らかにしたいと考えています。

研究活動以外にも定例行事として各種コンパやバーベキューパーティー等を行っており、これらのイベントは良い気分転換の機会となっています。また、多様な趣味・嗜好の人間が集まっていることもあって、研究においても遊びにおいてもそれぞれの個性が発揮され、活気あふれるエキサイティングな毎日を過ごしています。

卒業生の皆様はもちろん、学部生の方々も、本研究室に興味をもたれましたら是非お気軽にお立ち寄りください。なお、詳しい研究内容や研究室の様子についてはホームページ (<http://www.users.kudpc.kyoto-u.ac.jp/~p51907/negishi/index.html>) をご覧ください。

最後になりましたが、研究室一同、薬友会の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

生命科学研究所・システム機能学

本年度の生命科学研究所システム機能学分野は、小堤教授、竹松助手の先生方の他、教務職員1名、DC1名、MC8名、4回生3名、秘書1名、また共同研究先の理化学研究所の博士研究員1名、テクニカルスタッフ2名、合計19名で構成されています。今年はM1が5人と例年より多く、賑やかでとても楽しい雰囲気です。

研究内容は、

1. スフィンゴ脂質が関与するシグナル伝達機構に関する研究
2. 細胞死誘導型免疫抑制剤の作用機構に関する研究

3．シアル酸分子種の生物学的役割に関する研究

4．DNAチップを用いた複合糖鎖の発現制御に関する研究（理研フロンティア・糖鎖発現制御研究チームとの共同研究）

と多岐にわたっており、日々実験にいそしんでおります。

生体システム学分野が医学部構内に新しくできた医学・生命科学研究棟の方に移転したため、5月から生体システム学分野が使っていた部屋も使えるようになり、快適に実験をできる環境が整いました。また、21世紀COEに採択されているため、週1回90分の英会話講座を受けています。

もちろん研究ばかりでなく行事も色々行われており、本研究室だけのコンパやバーベキューに加え、生体分子認識学と合同で行われる各種コンパ、教室旅行、薬友会野球大会などのイベントがあり、研究の合間に和気あいあいと行われています。

詳しい研究内容や研究室の様子については、ホームページ(<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/kozutsumi/index.html>)を御覧ください。

卒業生の皆様、そして本研究室に興味を持たれた方、ぜひお気軽にお立ち寄りください。研究室一同、心よりお待ちしております。最後になりましたが、薬友会の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

薬友会部報

平成17年度薬友会役員

会 長 橋田教授
 副会長 伊藤教授
 総 務 生体情報制御学 (杉本)
 会 計 構造生物薬学 (中津)
 雑 誌 病態情報薬学 (西川)
 運 動 薬品資源学 (伊藤)
 教 養 薬品分子化学 (柳田)

平成17年度予算 (案)

《収入の部》

(円)

項 目	本年度 (案)	前年度決算
前年度繰越金	14,192,553	13,038,171
薬友会費 (名簿代を含む)	1,600,000	3,827,000
広 告 料	1,000,000	1,564,000
雑 収 入	100	346,125
合 計	16,792,653	18,775,296

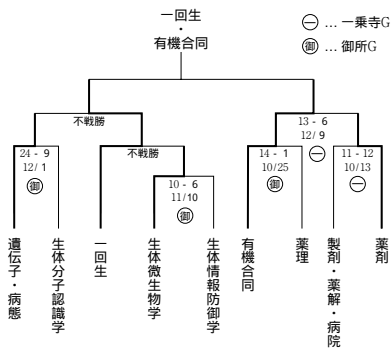
《支出の部》

(円)

項 目	本年度 (案)	前年度決算
総 務 部	1,590,000	1,240,836
雑 誌 部	925,000	2,957,881
運 動 部	445,000	123,000
教 養 部	325,000	261,026
予備費 (次年度繰越金)	13,507,653	14,192,553
合 計	16,792,653	18,775,296

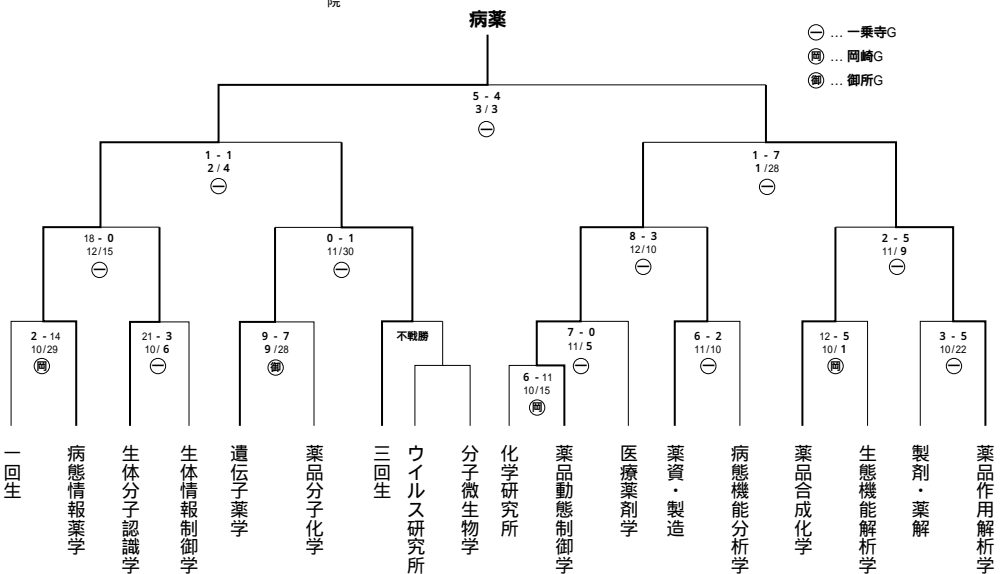
平成16年度

薬友会ソフトボール大会 結果報告



平成16年度

薬友会野球大会結果報告



京大薬友会会則

第1章 会名

第1条 本会は京大薬友会と称する。

第2章 目的

第2条 本会は会員相互の親睦を厚くし学識の向上を図ることを目的とする。

第3章 会員

第3条 本会の会員を分けて名誉会員、通常会員及び賛助会員とする。

第4条 名誉会員とは本会に功績ある者の中より役員会の議を経て総会において推薦された者をいう。

第5条 通常会員とは京都大学医学部薬学科及び薬学部職員・大学院学生及びかつてその職にあった者、卒業生、学生、並びに研究生をいう。その他京都大学医学部薬学科及び薬学部縁故ある者は役員会の議決によって通常会員となることができる。

第6条 賛助会員とは、名誉会員・通常会員以外で本会の主旨に賛同し、寄附その他の行為を為した者の中、役員会の承認を経た者をいう。

第4章 役員

第7条 本会には会長1名、副会長1名及び委員若干名を置く。

第8条 会長は京都大学薬学部長が之に当り、本会の事務を総括するものとする。

第9条 副会長には前会長が之に当り、会長を補佐するものとする。

第10条 委員は卒業生、学生共、各学生、各学科より1名、大学院各学年より1名、その他に総務、雑誌、運動各部の運営のため若干名の委員を会長が委嘱するものとする。

第11条 委員は2つの代表を兼ねる事ができない。

第12条 委員はいずれかの事業部に属し、庶務を司るものとする。その所属は役員会において決定する。

第13条 委員の任期は1年とする。但し重任は妨げない。

第14条 委員の委嘱は毎年3月に之を行なう。

第5章 事業

第15条 本会の事業を行なうため次の部を置く。

(イ) 総務部 (ロ) 雑誌部 (ハ) 運動部

(ニ) 教養部 (ホ) 会計部

第16条 総務部は予算の編成、企画、会計、連絡その他を行なう。

雑誌部は名簿の編成、雑誌の発行、その他を行なう。

運動部は運動会、旅行その他を行なう。

教養部は講演会、見学その他を行なう。

会計部は会計を行なう。

第6章 会議

第17条 会議を分けて総会及び役員会とする。

第18条 総会は必要に応じて、役員会の議をへて会長が之を召集することができる。

第19条 会長は3月に定例委員会を招集し、会計報告、新役員の委嘱、その他の協議報告を行なうものとする。又、会長は4月に定例委員会を招集し、予算および事業案を審議決定するものとする。但し、会長は必要に応じて臨時役員会を招集することができる。

第20条 役員会の成立は少なくとも全役員の3分の1以上が出席することを要す。

第21条 役員会の議決は出席役員の過半数を得なければならない。

第22条 役員会は、会計報告、予算案を会報紙上に報告するものとする。

第7章 会費

第23条 名誉会員及び賛助会員よりは会費の徴取を行わない。

第24条 年会費は通常会員1,000円、学生会員500円とする。但し、会費は名簿代金を含まない。

第8章 経費

第25条 経費の支出科目は次の通りとする。

総務部費、雑誌部費、運動部費、教養部費、会計部費、予備費

各事業費は役員会の議を経なければ互いに流用する事はできない。

予備費の支出は役員会の議決を要する。

第26条 毎年度の事業費の決定は役員会の議をへて之を決定する。本会の会計年度は毎年4月1日にはじまり翌年3月末に終る。

第9章 支部

第27条 会員10名を越える地方は役員会の議決を経て支部を設ける事ができる。

第28条 支部は役員会の議決を経て支部費を受けることができる。

第10章 事業所

第29条 本会は事務所を京都大学薬学部内に置く。

第11章 会則変更

第30条 本会の会則変更は役員会の議をへなければならぬ。役員会は会則の変更を会報に報告しなければならない。

河合明彦教授最終講義および記念パーティーのご案内

河合明彦先生には平成18年3月31日をもって定年退職されることになりました。先生は昭和42年に京都大学医学部をご卒業になり、京都大学付属病院にて一年間臨床研修をされた後、昭和43年に京都大学大学院医学研究科博士課程に入学されました。昭和47年に同課程を修了後、学術振興会奨励研究員を経て、昭和48年京都大学ウイルス研究所がんウイルス部門助手、昭和56年同助教授、昭和59年7月には京都大学薬学部薬品工学（2年後、微生物薬品学に名称変更）講座の教授に就任されました。その後の大学院重点化に伴う薬学研究科の改組により、現在は分子微生物学研究分野を担当され、研究、教育の両面に多大な功績を残して来られました。先生は一貫して狂犬病ウイルスについて生化学、細胞生物学、分子病理学などの面から基礎的研究を続けて来られました。最近はその成果を応用的な面にも生かし、ワクチンの改良や非ウイルス性遺伝子導入ベクターの開発へと展開されておられます。

また平成11年より2年間京都大学評議員として薬学部・薬学研究科のみならず京都大学の運営と発展にご尽力されました。さらに学外におかれましても昭和59年以来日米医学協力研究会ウイルス性疾患専門部会のパネルメンバーとして、また平成12年から2年間同部会の部会長として、東南アジア地域のウイルス性疾患を対象とした日米間の学術的交流を促進されるなど学会の発展に貢献されました。

このたび先生のご退職にあたり、多年のご功績を讃えこれを記念するため、下記のように最終講義および記念パーティーを開催致しますので、多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。

最 終 講 義 日 時：平成18年2月18日（土）

午後2時～4時

場 所：京都大学薬学部記念講堂
京都市左京区吉田下阿達町

記 念 パーティー 日 時：平成18年2月18日（土）

午後4時30分より記念撮影

午後5時30分より記念パーティー

会 場：京大会館（1階、101号室）
京都市左京区吉田河原町15-9（電話075-751-8311）

会 費：10,000円（当日会場で申し受けます）

申 込：綴じ込みハガキで来る1月31日（火）までにお申込み下さい。

河合明彦教授定年退職記念事業会

実行委員長 橋田 充

連絡先 栃倉 匡文

〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町

京都大学大学院薬学研究科

電話：075-753-4564

FAX：075-761-2698

e-mail：tad@pharm.kyoto-u.ac.jp